

---

# バカとテストとオレっ娘（笑

南斗悪斗那外名威！！

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとテストとオレッ娘（笑）

### 【NZコード】

N79980

### 【作者名】

南斗悪斗那外名威！！

### 【あらすじ】

なんか死んでしまった秋本奈留の転生する世界はバカテスの世界！オリ主とバカテスの主要人物たちがバカ騒ぎ！！（オリ主は巻き込まれ系）

プロローグは駄文であり、読まなくても問題ないです。

## プロローグ（前書き）

初めて小説を書きます。稚拙な文章ですがどうか楽しんでいってください。

なか指摘や要望や感想あつたら書いてください。

プロローグ

これはバカテスを知らない転生者（男の娘）が原作に介入してしまったお話。

どいつも中学一年生の秋本奈留です。

最近、ジャンプにハマっておりコンビニに買い物に外にでたのですが、その道中空から何かが頭から落ちてきて（チラつと見えたのですが植木鉢のようだ）気を失ってしまいました。

全く植木鉢を落ちそなとこりで置かないで欲しいものです。

・・・・・

じゃねえよー!? 何冷静に自分で起つたこと説明してるのー!?  
てか何処だよー! どつかの事務所の個室みたいなとこは・・・

普通あんな事故とか起きたら病院とかに運ばれるんじゃないかな?  
なぜにただの個室? 別にどつか治療を施されてるわけじゃないし・・・  
・ってあれ?

頭に傷とかそれっぽいものが無いんだけど当たり所が良かつたのか  
な?

当たった時点でおりしくないけど・・・

ガチャツ (扉を開ける音)

ん?

「すいませんでしたー!ー!

「はー?」

いきなり入ってきて謝ってきたのは18 22に見えるスーツ姿の女だった。

(なんかダメットさんに似てるな)

「本当にすいません…」ひかりのスイッチで死なせてしま…

はっ？

「死んでる？ ていうかなんで俺こんなところにいるんですか？」

そもそもあなた誰なんですか？」

死んだ？

「あー・・・自分は第一世界管理者です。第一生命世界の生命を管理するものであり、

他にもやることはありますがそれが主な仕事です。

私の名前は話してはいけないという規則があるので話すことができないです。

貴方がなぜ死んでしまったかというと、世界には人が存在…生きることができる数が決まっており、その数を超えてしまつと

世界に悪影響をもたらすのです。

例えば、時間がデタラメなつて過去と未来が一緒になつてしまつたりなどと

いった感じに世界の理が壊れてしまうのです。

そのようなことにならないために人には寿命が決まっており、死んだら天界や地獄に送り元の世界に余裕ができたら記憶を消して

元の世界をに転生を繰り返すシステムがあり、

それによつてバランスを保つていたのですが・・・

私のミスによつてそのバランスを少し崩してしまい、

やむなく貴方を寿命ではないのに殺してしまつたのです・・・

もし寿命でもないのに死なせてしまつたら

決して元の世界に再び戻る事はできなくなつてしまつんです。」

「ちよ・・ちよつと待てよーー。じゃあ俺はどうすればいいんだよ!

生き返る」ととかできないのかよー?」

やりたい事や、やり残した事がたくさんあつたのに・・・  
親孝行だつてしてないし、友達との些細な約束もはたして  
ない、

大体中学生なのにもう死ぬことになるなんて・・・  
一体俺はどうなるんだ？

ていうか俺のいた世界つて第一なんだ・・・何が基準かは知  
らないけど

「はい元の世界で生き返らせるとはできません・・・  
さつきもいつたように無理に生き返らせるとこれも  
世界の理が壊れてしまします。

人は決して生き返る事はできないことになつてているのです。

そこでこんな事例は今まで無かつたのですが、

貴方を他の管理者が務める異なる世界に転生してもらいます。」

ついでに第一世界とはすべての世界のはじまりだから第一世界と呼  
ばれ

第一世界に存在する人々がいろんな物語などを想像（創造）し、  
それによつて無限とも言える世界、人が生まれ、  
その新く生まれた世界にいる人がまた想像し、世界、人が生まれる  
という無限の連鎖を起こしていく  
今こつしている間にも世界は増えているらしい。

そして、はじめて最初の世界ができたにかは誰にもわからないようだ。

……話の内容がでかすぎると

「それで俺はどうか違う世界に転生できるんですね。  
どんな世界にいくんですか？」

「ランダムで決まるのかな？」

「貴方の世界にある物語の世界に第・・・世界に転生してもらいま  
す。」

（あまりにも途方もない数字なため省かせてもらいます）

「バカとテストと召喚獣って世界がベースのよつですね。  
ですがただ転生させるだけでは  
こちらの面田が立ちません。何か転生する際にいくつか願い事を叶  
えましょ。」

「後世界が崩壊をせぬほどのかみたいな」とはさすがに無理ですよ。」

バカとテストと召喚獣は名前とあらすじぐらいしか知らないな。  
けど自分がいた世界とそう変わらなかつたはず。

そういう世界じゃあ力とかあんまりいらないよね。

かめはめ波！－とか中二っぽい事やってみたいけど絶対使わないよ  
な：：

やつぱりお金とかかな？けど一生遊んでける金をくれとか、  
何かめつちやいいづらい・・・  
ほら欲望深いとかガメツイとか思われそつ・・・

あ、そうだ

「俺の親とかに遺言かなんか残してくれない？」

それと

俺の両親、俺なんかに本当に色々尽くしてくれたんだ。

それなのにいきなり俺死んだとか聞いたらショックなんじゃないかな。

自意識過剰かもしれないけど、

後は俺の転生する世界で 楽しい生活ができるようがしたい。できるかな？」

「遺言程度なら残せます。どんな遺言を残しますか?」

「遺言は「…………」です。」

「分かりました。」この度は真に申し訳ありませんでした。  
新たな人生をどうか幸せに過ごせる事を願っています。」

「おう!…?急に意識が飛ん…で…」

管理者 s.i.d.e

願い事があんなしょぼいのじゃ私が納得いかないです。  
なので私が勝手に都合のいい願い」とを増やしましょう

プロローグ（後書き）

## 主人公紹介（更新11／10）（前書き）

主人公の挿絵書いてみました。

模擬試験やつていて20分も時間あつたので問題用紙の裏に書いてました（笑）

まあ問題が解けなくて早く終わつただけですがね~~~~~  
あんまり絵はうまくないけど勘弁してください；；  
写メなので画質があらかつたので少しだけPCで編集しましたが  
やっぱり画質が粗い；；  
申し訳ないです。 いつかきれいな画像をJPGしてやる・・・！。

キヨン子をイメージして書きました。

キヨン子かわいいよキヨン子・・・  
ちなみにどつかに合つた画像を

記憶の奥底から思い出して書いただけなんですね・・・  
服も大体記憶だけで書いてみました。（違つたらあとで直そつかな）

## 主人公紹介（更新11/10）

# 主人公

昔から何かと厄介事に巻きこまれ氣味（某幻想殺しの軽い不幸・▼

男なのに、艶のある髪の毛に女顔で肌もベヒースキンであり、私服を来るとだれもが美少女と見間違う程である。

お小遣い欲しさに切るのを断念している。

勉強の出来はBクラス以上、Aクラスの平均以下（150～220）といったところ  
一つの科目に絞って勉強すればなんとか400点はとれるかもと言つたところ

基本めんどくさがり屋で辛口気味なのだが、  
当をときどき作つてやるくらい  
根がやさしい。（微妙か？）

その事でまた色々な事が起るのだがそれは別の話である。

原作開始時（高校2年）

身長164cm（これ以上伸びませんw）

体重49kg

年齢16歳

誕生日3/2

容姿

キヨン子です。（挿絵見てね）

> i 1 3 8 5 8 — 1 9 3 1 <

容姿は前世から同じ

特技

スポーツ全般、歌、演劇

スポーツは元々得意というわけでも苦手でもなかつたのだが管理人が勝手に願いを付け足したおかげで運動神経バツグンになつた。単純に運動神経だけで見るのなら鉄人並みと思っていい。（筋肉はあまりないから）

100m走 12秒台後半

バスケットでダンクを楽に決める。

サッカーでキャプテン翼ぱりのオーバーヘッドキックを決めれる。

喧嘩も雄二にすこし劣る程度のつよさ。

などなどである

歌は前世からセンスがあり、趣味として今もときどきカラオケなどで歌っているので、さらにうまくなつた。ちなみに音符はよめない。

演劇は秀吉に劇前日に部員一人が病氣で倒れたので代役を頼まれたのがきっかけで、隠された才能が発見された。

召喚獣

武器 ハルバード（日本でいう斧槍）

腕輪能力

これから決めようと思ひ（オイ

容姿

奈留をデフォルメにした感じ

おいおい挿絵を書くつもりですw

## 主人公紹介（更新11／10）（後書き）

すこしづつ紹介の内容を増やしていく予定です。  
2日に一回は投稿したいですね。（意思の弱い俺にできるかな？）

## 第一話（修正11／10）（前書き）

日がああああああ日がああああああ

あーどうも「南斗悪斗那外名威ー！」です。  
主人公の名前をナルつて書くことにしました。

奈留とか分かりづらい氣がするのでw

基本原作と同じ流れで書いていきます。

ときどきオリジナルの日常編とか入るという形で行こうと思つています。  
ではゆつくり読んでいくくださいねー

## 第一話（修正11／10）

いつも、色々あつて死んで転生することになつたナルです。

自分に今の状況を言うとなんか周り真つ暗です。

目が開く感じがしないし音も聞こえないです。

なんかこわいんだけど。

あれー？おかしいなあ転生するはずなんだけどな自分。

といつか転生つてどうやるのかいつ終わるとか聞いてなかつた〇一

悩んでこらすうちにナルは急に下の方に引っ張られた。

ぬああ！？なんだなんだ！？

5 10分程下に引っ張られ続けてたら急にまぶしくひんやりとしあとこに出た  
まぶつ！なにが起きたんだ！？

ん？なんか赤ん坊っぽい声が出たぞ！？  
一体なんなんだ！？

「おめでとうございます。元気な男の子ですよ」

んー？これってまさか赤ん坊から始まるのか？

・・・・えつ――――――!?!?/?!?

「よくがんばったぞ！律子！しかし男の子が生まれたか。  
なら名前は奈留、秋本奈留だ。よーしよし私が父さんだぞー」

…あれ？父さん？なんでここにいるの？

自分が知ってる父さんよりすこし若いけど・・・いや元々見た目若かつたけどそれ以上に若いな。それに律子って俺の母さんの名前だよね。もしかして…

「奈留…いい名前ね。本当に可愛らしいわね。ナル、私が母さんよ」

「やつぱり母さんだ…！」

「でもなんで？あれかなパラレルワールド？だけ？あれみたいな物かな。

管理人いわく人が世界を創つているとの話だけど…  
自分の知つてる親かどうかは分からぬけど。  
前世では親孝行の一つもできなかつたから…  
できるだけ親孝行して楽をさせてあげたいと思う。

「オギヤーオギヤアアアー！」

「あらあら元気な子ね。フフフ」

「そうだな、元気に育つてくれそうだ」

オギヤアアアアア

オギヤアアアツアアアア

・・・・・泣き声が止められない：

やあ、キングクリムゾン（よく知らない）で時間を飛ばし16歳になつた。  
ナルです。

俺は近頃、召喚システム？で有名になつてゐる文翔学園に入学して  
高校2年になつたばかりである。

何故文月学園に入ったのかといつと、ひとえに学費等が安いからである。

決して家が貧乏ではないが、むしろ金はあるほうだ。  
あんまり親に金を使わせたくないのだ。

・・・っとまあ正直これは建前のようなもので  
実際は召喚獣とやらを見たかったのだ。

え？ いきなり高校2年まで飛ばすなんて無理がある？  
いやいや確かに色々あつたよ？

赤子の頃は人には言えないような恥ずかしいことされまくったし。  
(仕方無いのだけどね)

幼稚園になつてそれなりに自由ができるが、さすがに幼稚園児達と  
遊べるほど

精神年齢は低くないのでストレスが溜まっていく一方だつたし  
親（主に母さん）に女装させられるし…  
抵抗して逃げたら次の日、目覚めたら女装させられてたり、  
数少ない男物の服がなくなつて女物しかなかつたり。  
髪の毛も切らせてもらえず伸びしている。

小学生の時も幼稚園の時と基本変わらなかつた。

まあ女装だけは小学校からそのようなことやつてると  
苛めの対象になつたりするなどの理由で辞めさせてもらひつたが。  
しかし髪の毛は相変わらず切らせてもらえない。

小学校に入つてから月1000円お小遣いをもらひえるのだが、切る  
のならあげないわよ

と母さんにいわれて断念した。

だって使い道なくともお小遣いって貰わないと気がすまないでしょ  
！？

思わない？そうですか。

（ちなみに女装していなくても女の子として接しられていたのは周  
知の事実である。）

中学校の頃にはお小遣いが5000円になつたことと土屋康太という親友ができた事以外変わつたことはない。

康太と知りあつた理由は、階段から転び落ちた時に助けてもらつたのがきっかけだ。

抱きかかえるよう受け止められ助けてもらつたのはいいものの康太から水鉄砲の「ごとく鼻血が吹き出して軽い騒ぎになつた。

しかしながら急に鼻血がでたんだろ?...?

まあそのまま中3になり文月学園に受験し、合格したのだ。高校1年の間のできことはまた今度説明するとして…

．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．

そして今、俺は2年のクラス分けの為に、  
クラス振り分け試験を受ける為に学校に登校している。

ん? あそこにはいるのは高1の時同じクラスだった吉井明久と坂本雄一か?

「よーし明久テスト前の小手調べだ！」

「三権分立は司法と立法ともう一つは何で成り立つか？」

「どうやらテスト対策をしているようだ。」

雄二「が明久に問題を出している。しかし、簡単な問題だな。」

「これくらいなら明久でも答えられると思うんだけど。」

「しかし、あのバカで有名な俺の友達、明久と雄二がテスト勉強をしているのは

「どこかシユールに見える。」

「なんにせよ、少しは勉強しているみたいだな。」

明久「ふ……あまり僕を見くびらないでくれよ雄二……」

「一いつまでは絞れる」

「二つ?」

雄二「ほつ?」

やはりバカはバカだったようだな。

「.....行政だ。」

「憲法が漢方のどっちかだったはず.....」

「あ、それじゃウチからも～！」

島田美波か。ドイツのから来た帰国子女でこれまた同じクラスだった人物だ。

「では基礎問題！　CH<sub>3</sub>COOHとは何でしょう？」

「……………」

英語は苦手なんだ。」

「え・・・・？これ英語じゃなくて科学「じゃあ僕こいつちだからー！」

「ちよ、ちよっと吉井！アンタ相当やばいんじゃー！？」

・・・・明久お前は絶対Fクラスだ。

「よ、相変わらずだな明久は。」

「おお、ナルか。まあ明久が急に勉強ができるようになつたرابつ  
くりだがな」

「あら、おはよう。秋本（相変わらずそこのらの女子より可愛いわね  
実は女ですって言われた方がまだ信じられるわ）  
・・・吉井つたら誤魔化して逃げるなんて……」

「まあ俺も明久と同じクラスでテストだから。じゃーまたな。 テ  
ストがんばれよー」

「お前もなー」

さてテスト頑張りにいきますか！

．．．．．．．．．．．．．．．．．．

クラス振り分け試験直前

「さあ、勉強道具をしまい必要な筆記用具だけを出してください。」

9時になり鐘がなつたらテスト開始です。」

ふう、それなりに勉強したからBクラスはいけるかな。

キンコーンカーンコーン・・・

先生「では始めてください」

まずは名前を書いてと……

ふむ、難しいと言われている振り分け試験だがなんとかいけそうだ。

いける！

カリカリ カリカリ カリカリ ・・・

「ハア…ハア……」

ん?なんか荒い息がいこえるんだけどなんだ?

フラッ ツカ (ペンを落とした音)

ガタンッ!!

「姫路さんッ!」

オロ?姫路さんがどうしたんだ?

先生「試験途中での退席は - - - - - 無得点扱いとなるがそれでいいかね?」

すこし厳しくないかい先生?

明久「ちょ、ちょっと先生具合が悪くなつて退席するだけでそれはひどいじゃないですか!」

明久が姫路のために弁護している。

人のためにそのようなことを言えるのは明久の長所だな。

しかし、まあそういうルールと決まっていたなら

先生に何を言つても仕方ないが：

と姫路さんの方を軽く向きながらそのようなことを考えていたのだが、

試験中に横を向いた罰が当たったのか、

開いてる窓から野球ボールが飛んできて見事に俺の頭に直撃した。

「ゴフッ！？」

ガタツ　バタンツ

「ちょ！？　ナル大丈夫！？」

明久が俺の事を心配して声を掛けてくれたようだが、意識が途切れかけてる俺に聞き取れるほどの余裕はなかつた。

こうして俺の振り分け試験が速攻で終わり俺がFクラスに入る事が決定し、とても騒がしくそして楽しい日々のはじまるのだった。

「なんでだああああああああ！？？」

と男の娘が叫んでいた気がするが氣のせいだ（笑

## 第一話（修正1-1-1-10）（後書き）

ああー誤字脱字　変なところはアリビレシ指摘してくださいね

## 第一話（前書き）

結構原作から文章ぱくつました。

## 第一話

バカテスト／化学

【第問1】

問 以下の問いに答えなさい。

【調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい。】

姫路瑞希の答え

「問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。

合金の例……ジュラルミン」

教師コメント

正解です。合金なので「鉄」では駄目といつ引っ掛け問題なのです  
が、姫路さんはひっかりませんでしたね。

土屋康太の答え

「問題点……ガス代を払つていなかつたこと」

教師コメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

「合金の例……未来合金（す／＼強い）」

教師コメント

す／＼強いと言われても。

秋本奈留の答え

「問題点……マグネシウムは火にかけると酸素と反応するから危険。  
合金の例……ナトリウムカリウム合金」

教師コメント

空気や水との接触によって発熱・発火・炎上・爆発に到るのでマグ

ネシウムより非常に危険です。

そもそもナトリウムカリウム合金は常温では水銀状液体であるので鍋の製作すら不可能です。

．．．．．

俺が文月学園に入学してから一度目の春が訪れた。

校舎へと続く坂道の両脇には新入生を迎える為の桜が咲き誇つてゐる。決して俺は桜を見る趣味はないのだが、この花びら舞い散るこの道に目を奪われていると。

後ろから肩を軽く叩かれた。

叩かれた方に振り向くと

「おはよーいのじや。ナル、結構はやい時間に来たのう。」

後ろにいたのは、特徴的な言葉遣い使い、小柄な体肩にかかるほど髪の長さで、どうみても可愛らしい美少女にしか見えない男……

……またもや同じクラスであった友人、木下秀吉だ。

互いに女と間違えられるという共通の悩みがあるせいか、妙に仲良くなってしまったのだ。

「おひ、おはよ。そうこうお前も早いじゃん。まあ秀吉はこいつも早いけどな。」

そのまま一緒に歩いていると校舎の入口で立っている、いかにも体育教師然とした男に呼び止められた。

——生活指導で厳しい事で有名な西村先生だ。

「おはよ、秋本、木下。」

「おはようございます、西村先生。」

挨拶を交わしながら西村先生は箱の中から一つ封筒を取り出し、俺達に差し出してくる。

宛名の欄に「秋本奈留」、「木下秀吉」と、大きく書かれていた。  
なんだこれ？

「なんですかこれ？」

「これにはお前らの入るべきクラスが書かれている用紙が入っている。」

「なるほど……しかし、面倒な発表の仕方ですね。」

「クラスと聞いてすこし気が重くなつた……」

「俺だつて正直めんじくさいが、この学校は世界的に注目されいる最先端システムを導入した試験校だからな。こんな変わったやり方もその一環つてワケだ。」

「別にそんな」としなくてもいい気がしますけどね。まあ事情があるんですかね。」

正直無意味な気がする。

「同感だ。」

先生もそう思っていたのか。

「まあ、そんなことより俺はお前がそれなりの優等生なのに実力を

出すこともなく、Fクラスに入る事になってしまったことが非常に残念でならない…………」

「言わないで下さいよ…………結構その事で落ち込んでいるんですか  
い。」

「なんじゃ？お主ともあらう者がFクラスなんぞに入るのじゃ？お主ならBクラスは堅いじゃろう。」

秀吉が封筒を開き苦虫を噉み潰したよつた顔をしながら、俺に疑問をぶつけてきた。

「ああ…………実は試験中に開いた窓から野球ボールが何故か飛んでき頭にぶつかり…………あとは察してくれ…………」

「それは…………」愁傷さまなのじや。ワシもFクラスじゃった…………しかしこいつには何じやが、お主がFクラスで嬉しいぞい。同じクラスに友達がいなかつたら寂しいから。」

「それに関しては俺も同感だな。じゃあ西村先生俺達教室に行つてますね。」

そう俺は言い残して教室に向かった。

途中Aクラスを覗いてみたが、あんな教室と認めない。高級ホテ

ルかなんかだと言わされた方が信じられる程に豪華な部屋であった。

Aクラスというだけでここまですごい教室が使えるのか。下位のクラスになっていく程教室の質が下がっていくのはしっていたが。これだと最下位のクラスはどのくらいひどいのか分かったものじゃないな。

卓袱台と座布団で床は畳だつたりして。

ないな仮にも教育機関なのだ。少なくとも勉強ができる程度の質はあるだろう。

「す、う、う、う、Aクラスは、どこかの高級ホテルみたいじゃのう。」

秀吉も俺と同じことを考えていたな。

そしてFクラスの扉を見つけ、俺は扉を開けた。

卓袱台と座布団に畳が並んでいて落書きがびっしりと書き込まれて  
おり、窓は割れていて天井には中々でかいクモの巣が堂々と張られ  
ている光景が目の前に広がり。  
もわっと、カビ臭いにおいがしてきた。

「冗談で思っていた事がさらにひどい状況として再現されている教室  
がここにはあった。」

俺は急に田畠がしてきて倒れそうになった。

クラッ…

「なつ、ナル！大丈夫かの！？」

倒れそうになつた俺を秀吉が支えてくれた。

「あ、ああ……大丈夫だよ。ありがとう。」

あまりの教室の酷さと臭いで思わず氣を失いかけたよ。  
これって裁判訴えられるんじやね？

「おい大丈夫か、ナル。まあ、この教室みて倒れたくなる気持も  
理解できるがな」

何故か教卓に立つてゐる雄一が俺を心配して声を掛けてくれた。

雄一は、背が高くやや細身だがむしろボクサーのような機能美を備えた感じがする体の持ち主だ。

顔は意思の強そうな釣り目氣味の野性味がする顔にたてがみのよつな髪型をしている。

教卓に立つてゐるが妙にその姿は似合つておりカリスマのようなものを感じる。

俺、管理人に容姿を変えてもらいうように言えばよかつた。前世から女みたいな顔に体の俺には雄一みたいな人が羨ましい。

くそぅつ……！！

「大丈夫だよ。というかこの教室の酷さには驚いた。本当に学校はこれでいいのか？あとなんで教卓に立っている。」

「さあな、おまえこそなんでFクラスにいるんだ？。もっと上位のクラスに行くと思っていたんだが。あとそれは俺がクラス代表だからだ。まあ実際はなんとなくだが。」

「へえ。雄一が代表か頼もしいじゃんか。…さつきもその事を話していたんだけど、まあいいや。

簡潔にいうと、試験中、窓からボール、俺頭ゴフツ、だ。」

「…………運が悪かったな。」

「…………ハアアアアア」

.....  
side Fクラス一同

“わわ……わわわわ……わわ……

おこ、秀吉とナルちゃんがいるわ…

わわわわ…

まじか！？「クラスはてつきり男しかいないと感つていたぜーーー！」  
「シャアアーー！」

ウオオオオーーーナルちゃん、秀吉コソビトこの心の潤こせえいれ  
ばもう何もいらないーーー！

どこに男しかいないですかーーー！？確かに胸は薄いけど  
私だつて女よーーー！

でもなんで秋本さんがいるんだ…？

そうだよな、結構頭がいいと聞いているが。

“ひやら事故かなにかがあつたらしく試験が受けれなかつたらしい。

ちょっと無視しないでよーーーー

だ。  
実は俺試験の日はちよつと頭が悪い日で、テスト受けられなかつたん

元々だろう。

やんのかコテアアアア！？？

side Fクラス end

「バカばっかりだな  
.....」

「まつたくだ。」

## 第一話（後書き）

バカテス書いている井上賢一さんの文才に驚いた。

## 第三話（前書き）

だいぶ文章がましになりましたかね？

## 第三話

島田がFクラスメンバ－（俺、雄一、秀吉を除く）をジエノサイドし終わつた頃に、俺の親友、土屋康太が教室に入つてきた。

「…………どうこう状況？」

康太が今のFクラスの惨状をみてすこし驚いている。

「バカ共の醜い争いだ。」

雄一が簡単に説明してくれた。

「康太、お前もFクラスか？というかそのバッグはなんだ。エベレストに登る登山家が持つてそなくらい大きいぞ。」

「…………なんでもない。（言えない。ナルの抱き枕×3と写真集、その他もろもろどっさり入つてるなんて決して言えない。）」

「…………なんでもない。（言えない。ナルの抱き枕×3と写真集、その他もろもろどっさり入つてるなんて決して言えない。）」

そんなに荷物を持つている必要性は全く見当たらぬぞ。

「まあいい。そろそろチャイムが鳴るから席についひぜ。席つて自由に決めていいみたいだな。」

「ワシは廊下側のこの席に座るつかの、といつかもうほとんじ埋まつておるのア。」

「じゃあ俺も秀吉の後ろに座るよ。」

席空いてないし話し相手が近いほうがいいからな。

「俺はすでに席は一番後ろにしてある。」

たしかに雄一のカバンらしきものが真ん中の一番後ろに置いてある。どうせ、雄一の事だから授業をサボるために先に席をとつておいたのだろう。だから早い時間から教室にいたのか。

ん？ 一つ席が空いてるぞ。まだ誰か来てないのかな。まあいいか。

康太は雄一の隣の席に着いたようだ。

キンコーンカーンコーン . . . .

チャイムがなつたか。つまり一人遅刻か。一年になった初めの日に  
いきなり一人も遅刻か . . .  
さすがFクラスというべきか？

といふかいつまで教卓にいるつもりだ。雄一。

チャイムがなつてから5、6分たつたが未だに担任の教師が来ない。  
クラスの設備だけじゃなく先生の質も悪いのか . . . . ?

ガラガラッ

「すいません、ちょっと遅れちゃいましたっ」

「早く座れ、このウジ虫野郎。聞こえないのか？ああ？」

教卓にいる雄一が遅れてやつてきたバカ。明久にいきなり罵倒した。明久と雄一って友達のはずだがいつも険悪だよな？本当に友達か？鉄人から逃げるときはとんでもないコンビネーションを發揮するがあれか喧嘩するほど仲がいいってやつか。

「…………雄一なにやつてんの？」

明久にしてはまともなことを言つた。

「先生が遅れているらしいから、代わりに立つてみた。」

先生はたしかに遅れているが雄一が代わりに立つている理由にはならんし、遅れているからじゃなくて初めっからそこに立つていただろう。

さらりと嘘をつくな。すっかり嘘が板についているようだな。これも鉄人などに言い訳をよく言つてるからだろう。

「先生の代わりって、雄一が？なんで？」

「一応このクラスの最高成績者だからな。」

「え？ それじゃ雄一がこのクラスの代表なの？」

「ああ、そうだ。」

「ヤリと口の橋を吊り上げる雄一。

雄一は昔、神童と言われる程、頭が良く勉強の成績もよかつた。今は成績こそ酷いが、頭のよさ、回転の速さは今も健在だ。成績が低いのは単純に勉強してないからだが、昔はしていたらしい。今、勉強してないのは昔とある出来事がきっかけらしいが、詳しい事は雄一から聞いてないので知らない。

「これでこのクラスの全員が俺の兵隊だな」

兵隊とすこし不謹慎な言葉ではあるが確かに、今の俺らはそれにぴつたり当てはまる。

そう、学園、文月学園に導入されている。

**最先端システム**——召喚獣システムを使った。試験召喚戦争

というものがあり、クラス間で戦い、勝つと相手の設備を奪い取ることができるものである。

例えば、FクラスがDクラスに勝つとDクラスとFクラスの教室が入れ替え、つまりFクラスの人人がDクラスを使うことができるのだ。

そして負けたDクラスはFクラスの設備を使わなければいけなくなるという、

中々おもしろいルールがあるので。

ちなみに格下が… FクラスがDクラスに負けると、Fクラスの設備がさらに落とされるのだ。

(まあFクラスはこれ以上下がろつても下がらないだろ？が)

そしてクラスの代表、雄一が戦争をするかしないか、を決める権限を持っているのだ。

ただし、戦争を申し込まれたら拒否することはできない。

…… というか俺達をふんぞり返って見下ろすな。なんかムカつく

「それにしても…………さすがはFクラスだね。」

明久がそんなことをいいながら空いてる席を探して、雄一の斜め右前の席が空いているのを見つけた。

「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

不意に俺の前から霸氣のない声が聞こえてきた。

寝ぐせのついた髪にシワシワのシャツを貧相な体に来た、冴えないさ

そうな風体のおっさんがいた。

「それと席についても聞えますか？HRを始めますので。」

ホームルーム

福原慎先生だつた。

本当に質の悪そうな先生が来たな・・・

「はい、わかりました」

「うーつす

明久と雄二が席に着きながら返事をした。

先生は明久達を少し待つてから教卓のまえでゆっくりしゃべり始めた。

「えー、おはよびやります。一年F組担任の福原慎です。よろしくお願ひします。」

先生はしつかりチョークの粉を拭き取られていない黒板に名前を書こうとして、  
やめた、チョークすらなかつたようだ。

「皆さんは全員に卓袱台と座布団は支給されていますか？不備があれば申し出してください。」

不備しかねえよ。

「せんせー、俺の座布団に綿がほどんど入ってないでーー」とクラスメイトの誰かが先生に不備を申し出る。

「あー、はー。我慢してください。」

もう俺は何も言わん。

「先生、俺の卓袱台の脚が折れています。」

「木工ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください。」

「

「センセ、窓が割れていって風が寒いんですけど。」

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請してお

あましょ。」

不幸だ。

「必要なものがあれば極力自分で調達するようにしてください。では自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願ひします。」

福原先生の指名で田の前の秀吉が立ち上がった。

つて俺二番田じやん。どうしよ、なんて紹介しようかな。

「木下秀吉じや。演劇部に所属してある。」

——うん趣味と名前だけでいいか。

そう俺が軽く悩み紹介するためのセリフを考え終わった頃に秀吉の番が終わった。

「——と。いうわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞ。」

俺の番だな

「俺は秋本、秋本奈留だ。最近の趣味は運動と歌、—— 動画を見ることがな。今年一年よろしく。」

適当に俺の紹介は終わらせた。

「なんでここにいるんですか。」

誰かに普通に聞いたら失礼な質問をされた。  
つち何回この説明したら済むんだ。

「色々あつて試験が受けれなかつたんだ。」

Fクラスのやつら イエーイとか喜んでんじゃねえ！――ていうか  
なんで喜んでるんだよ。

お前らを友達として接したこともなければ会話もした覚えがない奴  
らが大半だぞ。

そんな事を考えていると康太の紹介が聞こえてきた。

「…………土屋康太。」

かなり口数がすくない俺の親友は、小柄だが引き締まつた身体をしていて運動神経もいいがかなりのムツツリ野郎である。

しつかし女子が一人しかいない。むさ苦しいにも程がある光景だ。

「――です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど読み書きは苦手です。」

今度は唯一の女。島田の紹介の番のようだ。

「あ、でも英語は苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は――

「趣味は吉井を殴る事です

」

」

そんなことを言つたり、本当に実行するから女子扱いされないんだよ…

「はうはうー」

島田が明久に笑顔で手を振つてゐる。

さつきのセリフを聞いた後、笑顔で手を振られたらうええよ。

「あう。し、島田さん」

ほら怖がつてんじゃねえか。

「吉井、今年もよろしくね。」

しかし元同じクラスの奴。俺の知り合いが多いな。  
……俺の周りがバカばつかつてことか？

そんなことを考へてゐるうちに次々に自己紹介が終わつてゆき、明久の番になつた。

「――コホン。えーと。吉井明久です。気軽に【ダーリン】と読んでくださいね」

おげええええええ！　氣持ち悪！

明久なんて特徴「バカ」で十分すぎるつあとでぶちのめしてやるー!

明久も自分で言つたくせ気持ち悪がつてゐる……

そのまま紹介が継続されているなか、いきなりドアが開いた。

馬をせり出せて腹に手をあてていざる死一生得

# ピンクの髪は。

本人のやさしげな性格を表しているように見え、保護よくを書きたてるような容姿をしている。

姫路瑞希であった。

「あの、遅れて、すいせん。」

【えつ?】

クラス全体から驚いたような声が聞こえた。  
そんな中先生が姫路に声をかけた。

「一度よかったです。今自己紹介をしてくるといいなので姫路さん  
もお願いします。」

「は、はいーあの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします。」

小柄な体をさらに縮めながら声を上げる姫路。

そしてクラス全員が思っている事を聞く生徒が一人。

「はいっー質問です！」

「あ、は、はいっ。なんですか？」

登校するなりいきなり声をかけられ驚く姫路、そんな様子がすこし可愛く思える。

「なんでここにいるんですか？」

さつき俺も同じ、聞き様によつては失礼な質問をされた。

まあ俺は理由を知つているからいいが、大抵の人は知らないだろう。みんなが驚いている理由は、姫路は入学した頃から常にテストの成績順位一桁以内に名前をのこしていることで有名である。

誰もがAクラスにいると思っていたのだ。

そんな彼女がFクラスにいるのはたしかに驚くに足りえるだろう。しかし、よかつた、もう一人女子が増えて空気が少し澄んだ気がする。

「そ、その……」

緊張した面持ちで姫路が口を開く。

「振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……」

クラスの皆が「あ、なるほど」と納得し、うなずいていた。

そんな姫路の言い分を聞き、クラスの面々が言い訳の声が上がる。

『そりゃ言えれば俺も熱——がでたせいでFクラスにな  
ノモンダイ

『ああ。 化学だろ? アレは難しかつたな』

『俺は弟が事故に遭つたと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、ナルが寝かしてくれなくて』

「ぶちコロズぞ、てめえ…………！」

『今年一番の大ウソをありがと』

くそつ……俺を巻き込むんじゃ ねえ！！

俺には男色の毛はない！！

「で、ではっ、一年間よろしくお願ひしますっ！」

そんな状況にすこし動搖している姫路が紹介を終わらせ、逃げるよ  
うに明久の隣、康太の席の前に座つた。

「さ、緊張しましたあ～……」

席に着くや否や、安堵の息を吐いて卓袱台に突つ伏す姫路。

……このクラス疲れる。寝よ。

「秀吉、俺は疲れたから寝る。終わったら起こしてくれ。」

「分かったのじゃ、本当はよくないんじやが……お主今、顔色悪いからね。」

そんな秀吉の優しさに心打たれながら、このクラスのカオスさから現実逃避をするために。俺は卓袱台に突つ伏し寝た。

【大ありじやあああつ！】

ビックン！！！

「んな！？なんだなんだ！？」

せつかくいい気分で寝ていたのに今悲痛そうなクラス一同の叫びできっぱり起きました。

なんか雄一が教卓の前に立つて演説っぽこりとしてるや。

「どうう？俺だつてこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている。」

『そりだそりだ！』

『いくら学費が安いからって言つて、この設備はあまりだ！改善を要求する！』

『そもそもAクラスだつて同じ学費だろ？あまりに差が大きすぎる！』

『雄一はそんなFクラス達の気持に満足したのか、不敵に笑みを浮かべて――

「これは代表としての提案だが……」

――FクラスはAクラスに試験召喚戦争を仕掛けようと思つ。』

Fクラス代表、坂本雄一は戦争の引き金を引いた。

## 第三話（後書き）

3時間も書くのに時間がかった・・・

## 第四話（前書き）

五時だ、辻一！…ばんばん報告お願ひします！

（誤字脱字）

感想まつてます！

## 第四話

バカテスト／英語

問 以下の英文を訳しなさい。

「This is the bookshelf that my grandfather had used regularly.」

姫路瑞希の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

「これは

## 教師の「メント

訳せたのは「*Hi*s」だけですか。

吉井明久の答え

〔　　「\*X〕

教師の「メント

できれば地球上の言語で。

秋本奈留の答え

「*I*の本棚は私の祖母になつてゐる。」

教師の「メント

一体君に何があつたのですか。

.....

Aクラスへの宣戦布告。

正直Fクラスにとつては現実味の乏しい提案にしか思えなかつた。

『勝てるわけがない。』

『これ以上落とされるなんて嫌だ。』

『姫路さん達がいたら何もいらない。』

……最後に「達」という言葉が聞こえた気がするが気のせいだな。

とにかくそのような悲鳴が教室内のいたるところから上がる。  
確かにテストの成績で大方の勝敗が決まってしまうのだ。学年の優等生が集まるAクラスと基本成績が極端に悪い奴らが集まるFクラスとじや普通に考えれば勝てるわけがない。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせて見せる。」

そんな圧倒的戦力を知りながら、雄一はそう宣言した。

『何の根拠があつてそんなことを』

否定的な声が響き渡るが、不敵な笑みを浮かべる雄一のその雰囲気にクラスメイトの何人かは「本当に勝てるのではないか?」と思わ

せられていたようだ。

かくいう俺も勝てるような気がしてきた。

「根拠ならあるさ。」このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている。」

こんな雄一の言葉を受けて教室内が更にざわめく。

「それを今から説明してやる。」

壇上から俺達を見下ろしながらそう言った。

「おい、康太。畠に顔をつけて姫路のスカートを除いてないで前に来い。」

「…………（ブンブン）」

「は、はわっ」

必死になつて顔と手を左右に振り否定のポーズを取る康太。

姫路がスカートの裾を押さえて遠ざかると、康太は顔についた畠の跡を隠しながら壇上へと歩きだした。

流石だな。あそこまで恥も外聞もなく低姿勢からスカートを覗き込むなんて、康太以外にできる奴はないんじゃないかな。

「土屋康太。」こいつがあの有名な、寡黙なる聖職者——ムツツリー——だ。」

「…………（ブンブン）」

土屋康太といつ名前は今まで有ねじやない。だが、ムツツリー——とこいつ名前は別だ。

その名は男子生徒には畏怖を、女子生徒には軽蔑を以て挙げられる。

『ムツツリーだと……？』

『馬鹿な、ヤツがそうだとこいつのか……？』

『だが見る。あそこまで明らかに覗きの証拠を未だに隠さうとしているや……』

『ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ……』

畠の跡を手で押されてこる姿が果てしなく哀れを誇つ。たゞやういつた状況であろうとも、自分の下心は隠し続ける。  
異名は伊達じやない。

「？？？」

姫路は頭に多数の疑問を浮かべてこるのである。恐らくムツツリーの意味が分からぬのではないかと思つ。純粹っぽいからなあ、姫路は。

「姫路のことを説明する必要もないだろう。既だつてその力はよく知つてゐるはずだ。」

『えつ？ わ、私ですか？』

「ああ。ウチの主戦力だ。期待している。』

試合戦争では、彼女ほど頼りになる戦力は中々いないだろう。

『そうだ。俺たちには姫路さんがいるんだつた。』

『彼女ならAクラスにも引けをとらない。』

『ああ、彼女さえいれば何もいらないな。』

このクラスの奴らはいちいち誰かにラブコールを送らなければ気が済まないのか。

『木下秀吉だつていい。』

秀吉は学力では有名ではないが、他の事で有名だ。演劇部のホープだとか、双子の姉だとか。

『おお……！』

『ああ。アイツは確か、木下優子の……』

「そして、秋本奈留がいる。」

ん？俺か？ああそりやそつか。すくなくともBクラス程度の実力が俺にはあるからな。

『秋本奈留。アイツは運動神経が良く。その方面でかなりの活躍をしていると聞いてる……』

『演劇でも活躍していなかつたか？』

『それに勉強の方面ではその気になればAクラスに入れる程の実力の持ち主だ……！』

なんか照れるなあ。

「当然俺も全力を尽くす。」

『確かになんだかやつてくれそな奴だ。』

『坂本つて、小学生の頃は神童つて呼ばれていなかつたか？』

『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか。』

『実力はAクラスレベルが三人もいるつて事だよな！』

いけそ�だ、やれそ�だ、そんな雰囲気がクラス中に満ちてきた。

そう、気がつけば、クラスの士気が確実に上がっていた。

「それに、吉井明久だっている。」

.....シン

そして一気に下がる。

明久はオチ扱いか。雄二はとことん明久をいじるのが好きだな。

「ちょっと雄二……どうしてこそ、僕の名前を呼ぶのさー。全くそんな必要はないよねー！」

『誰だよ、吉井明久って。』

『聞いたことないぞ。』

「ホラ！折角上がりかけてた士気に翳りが見えてるし！僕は雄二達と違つて普通の人間なんだから、普通の扱いを——つて、なんで

僕を睨むの？士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょ！

俺もノリで明久を蔑むような目で見る。

「そうか。知らないなら教えてやる。こいつの肩書はく観察処分者だ

『それってバカの代名詞じゃなかつたっけ？』

クラスの誰かがそんな事を呟いた。

「ち、違つよ！…ひょっとお茶田なー6歳につけられる愛称で。」

「そうだ。バカの代名詞だ。」

「肯定するな、バカ雄一！」

観察処分者、学校生活をする上で問題があると判断された生徒に課せられる処分で、明久がそれに該当される…………明久が初めての観察処分者だそうだ。

「あの、それってどうこのものなんですか？」

姫路が小首を傾げている。優等生の姫路には馴染みがない単語らしい。

「具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかそういう類の雑用を、特例として物に触れるようになつた試験召喚獣でこなすといった具

合だ。」

そう、本来召喚獣は物に触る事が出来ない。彼らが触れることがで  
きるのはほかの召喚獣だけ。幽霊のようなものだ。  
だが、明久の召喚獣は特別製で物にさわれるのだ。

「そりなんですか？それって凄いですね。召喚獣って見た目と違つ  
て力持ちって聞きましたから、そんなことができるなら便利ですね。」

姫路が明久に羨望の籠つた眼差しで見つめている。なんか明久が照  
れている。

「あはは。そんな大したもんじやないんだよ。」

『観察処分者つてことは、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦  
しいつてことだろ？』

『だよな。それならおこなれと召喚できないやつが一人いるつてこ  
とになるよな。』

明久誤魔化していた部分が、あっさりバレた。

『気にするな。どうせ、いてもいなくとも同じような雑魚だ。』

『雄一、そこは僕をフォローする台詞を言つといひだよね？』

『とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服して  
みようと思つ。』

「うわ、すつごい大胆に無視された！」

明久がむず痒そうな顔をしている。

「皆、この境遇は大いに不満だろ？？」

『当然だ！』

「ならば全員ペンを執れ！出陣の準備だ！」

『うおお——っ……』

「お、お——……」

クラスの雰囲気に圧されて姫路さんが小さく拳を作り掲げていた。

「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になつてもらひ。無事大役を果たせ！」

と雄一が明久に命令する。てか大役なら雄一がいきやいいんじゃね？

「下位戦力の宣戦布告の使者はたいてい酷い目に遭うよね？」

なるほど、だから雄一は自分がいやな仕事を明久に任せたのか。

「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思つて行つてみる。」

「本当に？」

明久が疑っているが、こいつは散々自分を酷い目にあわせたやつの言葉を信じるのか？

「もちろんだ。俺を誰だと思っている。」

わずかな逡巡もなく、力強く断言する雄一。

明久はすこし考えた様子を見せる。

「大丈夫、俺を信じろ。俺は友人を騙すような真似はしない。」

「分かったよ。それなら使者は僕がやるよ。」

「ああ、頼んだぞ」

クラスメイトの歓声と拍手に送り出され、明久は宣戦布告をするためじロクラスに向かつた。

「騙されたあつー！」

．．．．．

ものすごい勢いで教室に転がり込んできた明久。・・・っちょ・・・  
大丈夫か？

服破れてるし肌が露出しているところに引っ搔き傷がたくさんある  
ぞ。

そんな明久を雄一が見下ろしながら呟いた。

「やはりそうきたか」

「やはりってなんだよーやつぱり使者への暴行は予想通りだつたん  
じゃないか！」

「当然だ。そんなことも予想できないで代表が務まるか。」

「少しほ悪びれろよ！』

去年の春から雄一と明久との付き合いがあるが、未だにこいつらの  
関係がわからない。

「吉井君、大丈夫ですか？」

「明久、傷から血が垂れているぞ。治療したほうがいいんじゃない  
か？」

俺と姫路が心配して明久に声を掛ける。

「あ、うん。大丈夫。ほとんどかすり傷。血はすぐ止まると思つよ。」

「

「吉井、本当に大丈夫？」

島田も心配のようすで、声をかけてくる。

「平氣だよ。心配してくれてありがと。」

「そう、よかつた……。ウチが殴る余地がまだあるんだ……」

「ああっーもうダメ！死にそつー！」

慌てて腕を押さえ、転がり回る明久。島田はなんだ鬼畜だな……

「そんなことはどうでもいい。それより今からリードティングを行なうぞ。」

他の所で話し合をするよう、雄一は扉を開けて外へ出て行った。  
「どうか雄一、もう少し友達には優しさを見せてやれよ。」

「あの、痛かったら言つて下さこね？」

「大変じやつたの」

そう告げて姫路と秀吉は雄一の後を追った。  
島田は特になにも言わずに歩いて行っていた。

「…………（サスサス）」

自分の頬をさすりながらムツツリーが続こうとしたが明久の一言で止まる。

「ムツツリー。覗いてた時の畠の跡なりもひ消えてるよ。」

「…………（ブンブン）」

「こや、今更知れても、マッシュコーーがHなのは知ってるから。

「

「…………（ブンブン）」

「Hまでバレていろのに否定し続けるなんて、ある意味凄いと思つ。」

「…………（ブンブン）」

「――何色だった？」

「みずいろ」

即答だった。

「やつぱりマッシュリーーは色々な意味です」こよ。

「…………（ブンブン）」

一人が馬鹿なやり取りをしている間、なんとなく下をみてみると妙に白い畳を見つけた。

「それにしてもこの教室の畳、カビの臭いがす」こよな。畳の色が白ばんでこるぞ。ていうか畳って白ばむ物だったっけ？

「そう俺は言こながらなんとなく、畳を捲りあげてみると……



そこには「腐海」があつた。

「ひいああああああつー? ? ?」

あまりの氣色の悪さに悲鳴を上げて、つい、隣にいた明久に抱きついてしまった。

ガクガクブルブル

「うな、ナル！？」ビーハーのセリフ――――

「つづ……!? わ、悪い!……………」畠の裏を見たら分かる

- 1 -

人に抱きついた事に俺は顔を赤くしながら離れ、少し落ち着くのを待つてそう告げた。

「畠の裏…………ひいああああああつーー？？」

明久が怪訝そうに畠を捲りあげ裏を見てから俺と同じような叫び声をあげて隣にいた康太に抱きついた。

「…………つ（ゾクツ）」

バキッドゴッ

康太は明久に抱かれたのに嫌悪を抱いたのか、明久の顔面と腹にワニツーパンチを繰り出した！

「ツガ！？ゲフツ！？」

明久が顔と腹を押さえながら座り込んだ。

「つちよ……悪かったけど、何も、殴る事は、なかつた……んじゅ……」

「反射。」

苦しそうに抗議する明久に、しれっと言い返す康太。

「つづ…は、早く雄一の後を追おうぜっ！」

「づく…まさか明久に抱きついてしまうなんて一生の不覚…………」

俺は先ほどの光景からの現実逃避を含め雄一達の後を追うために走り出そうとしたが、

「明久達、何やっているの？遅いわよ？」

中々こない俺たちを島田が様子を見に来たようだ。

まだ痛みが引かないのか少し青い顔をした明久が返事をした。

「「めん。今行くよ。」

「全く……一度、Das Br echen \_\_\_\_\_ええと、日本語だと……」

Das Bre……なんだって？

「…………調教。」

ムツツリーーーが島田に教えてあげた。てか調教つて……

「そう。調教の必要がありそうね。」

「せめて教育とか指導と言つてくれない？」

明久がさらに青い顔をしながら修正を頼んだ。

「じゃあ中間とつて Njutchtungsgang \_\_\_\_\_

「…………それは分からぬ!」

「確かに日本だと折檻だつたかな？」

「それ悪化してるとよ？」

גַּעֲמָן

「どうかマツツリー。どうして調教なんてドイツ語を知っているの？」

一般教養。

いやな教養だな。

「相変わらずムツツリーーは性に関する知識だけはズバぬけてるね。」

卷之三

「…………（アノアノ）」

なんて馬鹿な事を話しながら島田の後について行つた。

「遅かつたじやないか。」

「『めん、俺のせこだ……つまつ……』

あの腐海を想い出して気持ち悪くなってきた。

「何があったかは聞かないでおく。」

雄一が優しい。明久にもその優しさを分けてやれよ。

「ところで明久、しつかり宣戦布告してきたな?」

雄一がフーンスの前にある段差に腰を下ろす。

「一応今日の午後に開戦予定と告げてきたけど。」

俺らもそれにならって各自腰を下ろした。

「それじゃ、先に『飯でことね?』

「そうなるな。明久、今日の昼べりにはまともなもの食べりよっ。」

「さう思つならパンでもおいつてくれる嬉しいんだが。」

お前また弁当がないのか?

「えつ？ 吉井君つてお昼食べない人なんですか？」

姫路が驚いたように明久を見る。恐らく姫路は規則正しい生活を送つているんだろうな。

「いや。一応食べているよ。」

「……あれは食べてこらへと言えるのか？」

雄一が横槍を入れた。

「何が言いたいのさ。」

「いやお前の主食つて—— 水と塩だらう?」

雄一が憐れむような声で明久に告げた。  
すると明久がいかにも失礼な！といつた感じに反論した。

「きりんと砂糖だつて食べているやー。」

「あの、吉井君。水と砂糖つて、食べるとは言いませんよ……」

「舐める、が表現としては正解じゃねつな。」

「お前はそれで満足なのか？」

俺を含め皆優しい田で明久を見る。

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな。」

「し、仕送りが少ないんだよ。」

雄一の的確な指摘に明久が言い訳をする。

明久の両親は仕事の都合で海外にいる為、一人暮らしをしている。当然生活費はすこし多いぐらい貰っているのだが。遊び人の明久には少々足りないようだ。

「全く、ときどき俺が弁当作つてやつてるんだからもう少し余裕があつてもいいんじゃないか？明久。」

「えつ、秋本さんは吉井君に弁当作つてあげているんですか？」

何故か姫路がすこし焦り気味に俺に質問してきた。

「まあな、…………」いつ、去年餓死しかけてな——もちろん自分のせいだが。流石に見かねて俺が一回作つてやつたんだが、それがなぜか今も続いている。」

よく「いつ塩とかだけで生きていたな。

「そうなんですか…………あの、良かつたら私がお弁当を作つてきましょうか？」

「え？」

「明久なんか間違っているぞ。良く分からなければなんか違う。」

明久が突然の優しい言葉に目を丸にして驚いていた。

後、なにが違うかわからんが何か違つた気がするのでつひんじでしまつた。

「本当にいいの？僕、塩と砂糖——ナルの弁当以外のものを食べるなんて久しぶりだよ！」

俺の弁当（週2～4程度）だけって事は朝夜は毎回、塩と水、砂糖で我慢していたのか。  
本当によく生きているな。

「はい。明日のお昼でよければ

「良かつたじゃないか明久。」

「うん。」

雄一がからかつていてるのだが明久は姫路も手作り弁当といつひとで、それすら心地がいいと言わんばかりの笑みを浮かべている。

「……ふーん。瑞希つてずいぶん優しいんだね。吉井「だけ」に作つてくるなんて。」

島田が不機嫌そうにして、棘のある言葉を姫路に言い放つた。

「あ、いえーその、皆さんにも……」

「俺達にも？いいのか？」

雄一が聞き返した。

「はい、嫌じゃなかつたら」

姫路はやさしいな。俺達のまで作つてくれるのか。  
明久がどことなく不満げではある。

「それは楽しみじゃの」

「どんな料理なんだらうな？」

「…………（「ク」「ク）」

「…………お手並み拝見ね。」

姫路さんのも含めると7人分。作るの大変そつだなってか7つも弁当箱あるのか？

「分かりました。それじゃ、皆さんに作つてきますね。」

何一つ嫌な顔をしない彼女。

「姫路さんて優しいね…………今だから言ひたゞ、僕、初めて会つ前から君のこと好き――」

「おい明久。今振られると弁当の話はなくなるだ。」

「――にしたいと思つていきました。」

なんか明久が乗り切った！みたいな清々しい顔をしている。どれだけめでたいんだ。

「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じやぞ。」

「明久。お前はたまには俺の想像を超えた人間になる時があるな。」

「明久。初めて会つ前から——つてお前に何があった。」

「ツツコリビニるが多すぎるぞ明久。

「だつてお弁当が……」

「さて話がかなり逸れたな。試戦に戻るつ。」

「おお。すっかり忘れてたぜ。」

「雄一。一つ気になつてたんじやが、どうしてロクラスなんじや？  
段階を踏んでいくならEクラスじやろつし、勝負に出るならAクラ  
スじやろつ。」

「そういえば、確かにそうですね。」

「まあな、当然考えがあつてのことだ。」

「雄一が鷹揚にうなづく。

「どんな考えですか？」

「色々と理由はあるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな。」

「え？でも、僕らよりはクラスが上だよ？」

明久の言つとおり成績でクラスは分けられているので、Eクラスは当然俺らFクラスより試験の点数が良い。

だから単純に考えたら明久の疑問はもつともなのだが……

「ま、振り分け試験の時点では向こうが強かったかもしれないな。けど、実際のところは違つ。オマエの周りにいる面子をよく見てみろ。」

「えーっと……」

明久がこの場にいるメンバーを見渡し、ふむふむと頷く。

「美少女三人と馬鹿が一人とムツツリが一人いるね。」

「誰が美少女だと…？」

「ええつー・? 雄一が美少女に反応するのー・?」

「…………（ツボ）」

「／＼／＼／＼／＼（ブイツ）」

「ムツツリーーまで！？ナルはかわいいからいいけど、ジリシヨウ、  
僕だけじゃツツ ノリで便乗して俺が男として見られているか確かめたら肯  
定された・・・・・・

〇一」

「まあまあ・落ち着くのじや。代表にムツツリーー。ナルも落ち込  
むでない。」

「そ、そうだな」

「いや、まず美少女で取り乱すことに対するツッコミを入れたいんだけど。」

「まあ、要するにだ」

「コホン、と咳払いして雄一が明久を無視して説明を再開する。

「姫路とナルに問題ない今、正面からやり合ってもEクラスには勝てる。Aクラスが目標である以上はEクラスなんかと戦つても意味がないことだ。」

「？それならDクラスとは正面からぶつかると厳しいの？」

「ああ。確實とは言えないな。」

「だったら、最初から目標のAクラスに挑もうよ。」

たしかに明久のいうことに一理ある、元々Aクラスを倒すのが目標だからな。

しかし、明久は人の話を聞いてないな。大雑把にだが、さつき教室で話していただろう。

「初陣だからな。派手にやつて景気づけにしたいだろ？それにさつき言いかけた打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだしな。」

「あ、あの！」

姫路にしては大きな声だな。

「ん? どうした姫路」

「えっと、そのさつき言ひかけた、って……吉井君と坂本君は、前から試合戦争について話しあっていたんですか?」

「ああ、それか。それはつこさつき、姫路の為に明久に相談されて——」

「それはそつとー。」

誤魔化せてないぞ明久。

「さつきの話、Dクラスに勝てなかつたら意味がないよ。」

「負けるわけないさ。」

雄一が明久の心配を笑い飛ばす。

「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる。」

いいか、お前らのウチのクラスは——  
——は最強だ。」

不思議な感覚だった。

根拠のない言葉でありながら、何故かその気になつてくる。  
雄一の言葉にはそんな力があった。

「いいわね。面白そうじゃない。」

「そうじやな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの。」

「…………（グッ）」

「が、頑張りますっ」

「全力で、協力してやるよ。（あんな畳の下が腐海の教室なんて御免だ！）」

「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう。」

そんな俺達の返事に気を良くした雄一が説明を始め、涼しい風がそよぐ屋上で、俺達は勝利の為の作戦に耳を傾けた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

——全く雄一は平氣で嘘をつく。本当に僕の友達なのか。週に七回は疑つよ。

「吉井君、大丈夫ですか？」

「明久、傷から血が垂れているぞ。治療したほうがいいんじゃないか？」

僕の有様を見て、姫路とナルが駆け寄つてくれる。  
ああ、なんて優しいんだろう。

「」は男として余計な心配をかけないよつてしないと。

「あ、うん。大丈夫。ほとんどかすり傷。血はすぐ止まると思つよ。」

「吉井、本当に大丈夫？」

島田さんまで来てくれた。身体は痛いけど、こいつって心配されるのも悪くないね。

「平氣だよ。心配してくれてありがとう。」

「せつ、よかつた……。ウチが殴る余地がまだあるんだ……」

「ああつー！もうダメ！死にそつー。」

慌てて腕を押されて転げ回る。島田美波、本当に油断ならない女だ。

「そんなことはどうでもいい。それより今からリーテイningを行つぞ。」

他の所で話し合ひをするようで、雄一は扉を開けて外へ出て行つた。  
「いかが雄一、僕たち友達だよね？優しさを少しほ見せてくれてもいいんじゃない？」

「あの、痛かつたら言つて下さこね？」

「大変じやつたの」

そう告げて姫路さんと秀吉は雄一の後を追つた。  
島田さんは特になにも言わずにひいて行つていた。

「…………（サスサス）」

自分の頬をさすりながらムツツリーーが続こうとしたが僕は指摘をしてあげた。

「ムツツリーー。覗いてた時の畠の跡なつもつ消えてるよ？」

「…………（ブンブン）」

「いや、今更否定されても、ムツツリーーが何のは知つてゐから。」

「…………（ブンブン）」

「…………（ブンブン）までバレてゐるのに否定し続けるなんて、ある意味凄いと思

४०

「……………！」（ウンウン）

何色だつた？

「みすいろ」

即答だつた。

やつぱりムツツリーは色々な意味ですごいよ。

「アシタス」 - 1

「それにもかかわらず、教室の畳、カビの臭いがすごいよな。畳の色が白ばんでいるぞ。ていうか畳つて白ばむ物だつたっけ？」

……ああ、にしてもナル、君はなんて可愛いんだろう。いつ見ても本当に男なのかと疑ってしまう。

そんなナルが置を捲りあげているのを横目で見ていると。

「ひいああああああつつ！？？？」

可愛らしい悲鳴をあげて僕に抱きついてきた……っえ？

ああ、いい臭いとナルの柔らかい身体が……一しかも若干涙目で震えている・・・

がつはああああ！？

耐えろ！僕の理性！！

「つな、ナル！？」どうしたのさ急に――」

「うう……！？わ、悪い！………… 置の裏を見たら分かぬ…………」

そうナルが動搖しながら離れ答える。

あ……もうちょっと堪能していたかつた。

にしても流石僕、あのナルが保護欲をそそる小動物のように怯えているのだ。

いつもの若干不機嫌そうにしているナルとのギャップの差が激しい

せいで余計に萌えてしまった。

あの状態のナルを見て襲わない事ができるなんて世界中どこを探しても僕以外いないだろ？

しかしナルは何を見て驚いたんだ？

確かめる為に僕も置を捲りあげてみた。

「置の裏……？…………ひいああああああつ――！？？？」

キモ――なんかネバア――つしててる――ネバア――つて！

僕は畠の裏を見てからナルと同じような叫び声をあげて隣にいたムツツリーに抱きついてしまった。

「…………っ（ゾクッ）」

バキッ、ドゴッ

ムツツリーは男の僕に抱かれたのに嫌悪を抱いたのか、僕の顔面と腹にワンツーパンチを繰り出された！

「ツガー！？ ゲフッ！？」

「つちゅ……悪かったけど、何も、殴る事は、なかつたんじゃ……」

「反射。」

苦しみながら抗議する僕に、しれっと言い返すムツツリーがいた。

僕は気持以外でもありがたく頂くの。」

「えつ？ 吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

姫路さんが驚いたようにこちらを見る。きっと姫路さんは規則正しい生活をしているんだろうな。いろいろと発育もよれやうだし。

「こや。一応食べてこるよ。」

「…………あれは食べていると嘔吐するのか？」

雄一の横槍に入る。

「何が言いたいのか。」

「いやお前の主食って――――水と塩だらけ。」

雄一の憐れむような声。

失礼な！ 僕をバカにするにも程があるー。

「あちんと砂糖だつて食べていぬやー。」

「あの、吉井君。水と砂糖つて、食べるとせまらなくなる……

「舐める、が表現としては正解じゃねつな。」

「お前はそれで満足なのか？」

皆の妙に優しい日が逆に辛い。

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな。」

「し、仕送りが少ないんだよ。」

僕の両親は仕事の都合で海外にいる為、一人暮らしをしている。生活費は貰っているのだが。

趣味つてお金かかるよね。

「全く、ときどき俺が弁当作つてやつてるんだからもう少し余裕があつてもいいんじやないか？ 明久。」

ナルが弁当を作ってくれなかつたらきっと去年の夏ひるひるニライカだつたよ。

ナルつて少し辛口ではあるものの、根が優しいよね。嫁にしたい。

「えつ、秋本さんは吉井君に弁当を作つてあげているんですか？」

何故か姫路さんがすこし焦り氣味にナルに質問してきた。

「まあな、こいつ、去年餓死しかけてな——もちろん自分のせいだが。流石に見かねて俺が一回作つてやつたんだが、それがなぜか今も続いている。」

本当にあの時は助かつた。

「そりなんですか……あの、良かつたら私がお弁当を作つてきま  
しょうか？」

「え？」

「明久なんか間違つているぞ。良く分からぬけどなんか違う。」

突然の優しい言葉に僕は耳を疑つた。

「本当にいいの？僕、塩と砂糖——ナルの弁当以外のものを食べるなんて久しぶりだよ！」

「はい。明日のお昼によければ」

「良かつたじやないか明久。」

「うん。」

「……」は素直に喜び。雄一のからかう口調だつて心地いい

「……ふーん。瑞希つてずいぶん優しいんだね。吉井「だけ」に作つてくるなんて。」

島田さんが不機嫌そうにして、棘のある言葉を姫路さんに言い放つた。

「やつぱりやめます」なんて言われたらどうしてくれるんだ！

「あ、いえーその、皆さんにも……」

「俺達にも？いいのか？」

「はー、嫌じゃなかつたら」

姫路さんはいい子だなあ。雄一達のまで作つてあげるなんて。  
僕だけじゃないのが残念だけど。

「それは楽しみじゃの」

「どんな料理なんだろ?」

「…………（「ク」）」

「…………お手並み拝見ね」

姫路さんのも含めると7人分。作るのが大変そつだ。

「分かりました。それじゃ、皆さんに作つてきますね。」

何一つ嫌な顔をしない彼女。

僕には考へることすらできない行為だ。なんて献身的で、魅力的な  
人なんだろう。

「姫路さんて優しいね…………今だから言つけど、僕、初めて会つ前  
から君のこと好き――」

「おい明久。今振られると弁当の話はなくなるぞ。」

「――にしたいと思つていました。」

つふ――ですが僕の判断力。

「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じやぞ。」

恨むぞ僕の判断力。

「明久。お前はたまには俺の想像を超えた人間になる時があるな。」

「明久。初めて会つ前から——つてお前に何があつた。」

「だつてお弁当が……」

「これも生きる為の行動。すべて貧乏が悪いんだ！！」

s i d e u o t 明久

## 第四話（後書き）

つかれた5時間かかった。

腐海は 風の谷のナウシカを思い出していくだければいいかと

## 第五話（前書き）

前書き ついに、戦争がはじまります。

……ラノベを読むのに1時間ちょいしかからないのに。

P10 20分かくだけで3時間は軽く使いつつどうにつけど。

明日三者面談。死ねます。

今回のバカテストはオリジナルです

## バカテスト／クイズ

HRの時間が余り、何もしないのもあれですので、即席のクイズを皆さんにやつて貰います。

三匹の子豚達に名前を付けたのはなんとなくです。

### 【クイズ】

この問題はとある物語から抜粋しました。

『母さん豚は三匹の学君と悟君と昭君といつも前の子豚たちを血活かせるために、外の世界に送り出しました。

学君はわらで家を建てました。

悟君は木の枝で家を建てました。

昭君はレンガで家を建てました。

しかし、ある日、大きな悪いオオカミがやってきました。

さて、一体この話はどうなるのでしょうか。』

姫路瑞希の答え

『最初に狼が学君のわらの家を吹き飛ばし、子豚を食べてしまいま

す。

一番田に悟君は木の枝で家を建てるが、やはり狼との同様のやり取りの末に、学君と同じ運命を辿ります。

三番田の昭君はレンガで家を建てます。

狼はいくら息を吹き付けても、レンガの家を吹き飛ばすことはできませんでした。狼は昭君を家の外におびき出そうとたくらみますが、失敗に終わります。

最後に狼は煙突から忍び込もうとしますが、昭君が用意した煮えたぎる鍋一杯の熱湯に飛び込んでしまい。釜茹でにされ死んだ狼を昭君は料理すると、そのまま食べてしまいました。』

### 教師のコメント

その通りです。

鍋に飛び込む出来事を知らない人たちが多いのですが、姫路さんは知っていましたね。

### 吉井明久の答え

『狼が子豚達を食べてまん丸太ったあと、僕が食べる。』

### 教師コメント

直接豚達を食べればいいじゃないですか。

## 秋本奈留の答え

『学んで、悟つて、諦める。』

### 教師コメント

学んで 悟つて 謹める  
<まなぶ><さとる><あきら>

誰がうまこことを言えど。

s i d e 明久

「吉井！木下達がDクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入ったわよー。」

ポニー・テールを揺らしながら駆けてきたのは同じ部隊に配属された

島田さん。こうして改めてみると、背は高くて足も綺麗なのに、どこか女性としての魅力に欠ける。一体何が足りないんだろう。

「ああ、胸か。」

「アンタの指を折るわ。小指から順に、綺麗に。」

マズい。何かのスイッチに触れたっぽい。

「そ、それよりホラ、試合戦争に集中しないと…」

今現在前線にいるのは秀吉率いる先行部隊で、そことFクラスの中間辺りに僕がいる中堅部隊が配置されている。引き受けた覚えもないけど、部隊長になつて以来以上は僕には部隊のみんなを導く義務がある。

ここは気を引き締めていこう。

まずは戦場の雰囲気を感じよう。耳を澄ませて、前線部隊の戦闘様子を聞き取るんだ。

『さあ来い！負け犬が！』

『て、鉄人！？嫌だ！補習室は嫌なんだつ！』

『黙れ！捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！終戦まで何時間かかるかわからんが、たっぷりと指導してやるからな。』

『

『た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問耐えきれる気がしない！』

『拷問？そんなことはしない。これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは一富金次郎、といった理想的な生徒に仕立て上げてやるわ。』

『お、鬼だ！誰か、助けつ——イヤアア——（バタン、ガチャ）』

四

よし試召戦争の雰囲気は大体わかつた。

「島田さん、中堅部隊全員に通達。」

「ん、なに？作戦？何て伝えんの？」

「（）で僕が出すべき指示はただ一つ。

「総員退避、と。」

「（）の意氣地なし！」

殴られた。しかもチョキで。

「目が、目があつ！」

「目を覚ましなさい、この馬鹿！アンタは部隊長でしょう！臆病風に吹かれてどうするのよー！」

その覚ますべき目に激痛が！そいついた台詞はせめてグーカパーで殴った後に言って欲しい！

「いい、吉井？ウチらの役割は木下の前線部隊の援護でしょう？アイツらが戦闘で消耗した点数を補給する間、ウチらがその前線を維持する。その重要な役割を担っているウチらが逃げだしたりしたら。アイツらは補給できないじゃない。」

島田さんがヤケにもつともらしい事を言つ。

確かに彼女の言うとおりかもしれない。僕らの役割は決して軽いものじゃない。働き次第ではこの戦争を大きく左右してしまうだろう。それなのに、僕は戦死ペナルティの補習が怖くて逃げようだなんて……！

島田さん君はなんて男らしいんだ！何故だか涙が止まらないよ！（あと激痛も）

「『』めん。僕が間違つていたよ。補習室を恐れずにこの戦闘に勝利することだけを考えよう。」

「ええ。それに。そこまで心配することもないわ。個別戦闘は弱いかもしぬないけど、これは戦争なんだから多対一で戦えばいいのよ。」

「

その通りだ。点数じゃ負けているけど、それだけで試合戦争の勝敗が決まるわけじゃない。

やり方次第では勝てる可能性は十分にあるはずだ。

「そうだね。よし、やるぞ！」

「うん。その意気よ、吉井！」

拳を擧げる僕たち。大丈夫、僕らならやれる！

と意氣込んでいると島田さんのところに報告係がやつてきた。

「島田、前線部隊が後退を開始したぞ！」

「総員退避よ。」

「わざと言つてることが全然違つ！」

「吉井、総員退避で問題ないわね？」

大いに問題ありのよつた氣もするけどさつと戻のせいだらう。

「よし、逃げよ。僕らには荷が重すぎた。」

「さうね、ウチらは精一杯努力したわ。」

くるじとFクラスに向かつて方向転換。  
すると、振り返つた先には本陣（Fクラス）に配置されていはづ  
のクラスメイト、横田君がいた。

「ん？ 横田じゃない。どうしたの？」

「代表より伝令があります。」

メモを見ながら横田君がハキハキとした声で告げる。

「『逃げたらコロス』」

「全員突撃しろー！」

気が付いたら戦場に向かつて全力ダッシュをしていた。それもこれ

も、Fクラスの勝利を思つての事」

side end 明久

side ナル

「あの馬鹿共諦めよいつかるのが叫かれるだらけ。」

「そんな事だらうと思つて、ムツツリーに盗聴器を明久に付けて  
もらつたのさ。」

明久達が頑張っている?頃、俺らはFクラスで明久につけた盗聴器

で状況を聞きのんびりしながら過<sup>く</sup>じてこる。

「あ、あの。私は戦争に出なくていいのですか?」

「ああ、構わない。姫路は切り札で今回の戦争に出すつもりはない。

』

「雄<sup>お</sup>」。俺はどうするんだ?今の状況を見ている限り善戦<sup>こそし</sup>しているもの、いまひとつ押しがたりないと思つんだけ<sup>ど</sup>。』

「ああ、最後の最後にナルを出すつもりだ。お前ならワクラスクらいなら楽勝だろ<sup>う</sup>。」

まあ、確かに勝てるがなんか自分がサボつている気がして罪悪感がある。

とつあえずやる事がないので、盗聴器の音声を聞く事に集中しよう。

『よし。島田さん、ここは君に任せて僕は先を急ぐよ。』

明久がいきなり外道っぽい事を言つていた。

『ちよつ……普通逆じゃない!?』『僕は僕に任せて先を急げ!』  
じゃないの!?

『そんな台詞<sup>だじ</sup>、現実世界じゃ通用しない!』

『よ、吉井!』のゲス野郎!』

『お姉さま逃がしません!』

『へへ、美春ーやむしかなこつてーとね……ー』

……こつでも愉快な奴らだなあ……

『サモン!ー』

どつやら戦闘に入ったよつだ。

『お姉さまに捨てられて以来、美春はこの田を一田千秋の想いで待つていました……』

『ちよつとーいい加減ウチのことは諦めてよー』

『ヒレハヒレ田舎者、お姉さまつて——』

『嫌ですーお姉さまはいつもでも美春のお姉さまなんですよー。』

『来ないでー私は普通に男が好きなのー』

『嘘ですーお姉さまは美春の事を愛してゐるはずですよー。』

『いの分からずやー。』

「頭が痛くなつてきた。あいつら戦闘じゃなくて痴話喧嘩してゐるや

…

「いつもの事だ。」

いつもなのか……俺はすこし疲れたので卓袱台に腰掛けた窓の外を見てぼうっとするにじった。

『——諦め——んから——このまま無事に卒業でき  
るなんて思わないでくださいね————』

美春とやらの断末魔がどこからか聞こえてきた。

こええよ……

それから40分程経つた。

今の状況は前線を吉井達中堅部隊が全力で守っているが、さすがに劣勢のようだ。援軍を送つてやりたいところだが、作戦につぎ込む戦力が足りなくなつてしまつので送る事が出来ない。

そして俺達は長期戦に持ち込むためおつとりした初老の男性で採点の甘さに定評があり、代わりに採点が遅い田中先生を呼んだ。

対してDクラスは対照的に厳しいが採点の速さが群を抜いている木内先生を呼んだようだ。

俺達の作戦を読んだのか短期戦に持ち込むつもりのようである。

『もう少——待つて——船越生を呼んでいるー。』

数学の船越先生かな？

まずいな。恐らく相手は採点目的じゃなく立会人になつて貰う為だらう。これ以上戦線を拡大されると実力差がはつきり出てしまう。

「船越先生を相手は呼んだようだな……そういえばあの先生婚期（

45歳／・独身)を逃して、生徒達に単位を盾に交際を迫つてゐるとか聞いたな。関係ない話だが。」

「ほひ。そういうえばそんな話もあつたな……！」ツクツクツク、いわい作戦を思いついたぜ。」

「ん? どんな作戦だ?」

雄一が良い作戦という程だ。よほど効果があるんだろう。たまたま教室に寄つていた須川を呼び、紙に何か書き込み渡す雄一。須川がその内容を見て腹筋を捩じらせていた。

おい、気になるじゃないか。

「待つていれば分かる。」

廊下にでている須川の後姿を見つめながら「ジッとするほど」ヤけている雄一がそう言った。

少し時間経つたら放送の合図が鳴つた。なんだ?

ピンポーンパンポーン<sup>く</sup>連絡いたします。>

聞き覚えのある声で放送室が鳴りだした——須川じゃないか、一体何をするんだ。

〈船越先生、船越先生〉

〈吉井明久が体育館裏で生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです。〉

……明久、俺は君の事を一生忘れないよ。

「お、おい……雄一いくらなんでもこれは……」

「ハツハツハ、問題ない。明久の事だ。どうせ、なんだかんだいつて乗り切るだろ?」

「酷い信用の仕方だな……」

今度豪華な弁当でも作ってやろうかな。明久が不憫すぎる。

『吉井隊長……アンタあ男だよ!』

『ああ。感動したよ。まさかクラスの為にそこまでやつてくれるなんて!』

『おい聞いたか今の放送』

『ああ。Fクラスの連中、本氣で勝ちに来てるぞ。』

『あんなに確固たる意志を持っている奴らに勝てるのか……?』

『皆、吉井隊長の死を無駄にするな!』

『絶対に勝つぞー!』

10

『...隊長?』

二三

す?

須川ああああああああ

士氣がめちゃくちゃ上がったFクラスの雄たけひ声とFクラスの玉砕覚悟の行為に弱音を吐くDクラスの面々。明久の叫び声が盜聴器から聞こえた。

「……まさか雄一ここまで考えていたのか？」

……たおが「に」では考へてない!

さすがの雄一も士気が上がつて相手のが下がるとまでは思つていなかつたようだ。

「さて、そろそろ明久達の援護に行つてくる。」

「りよーかい」

俺、姫路を除いた本陣にいる面子全員で援護にてた。

状況が気になるのでまた盗聴器を聞くのに集中する。

『ああっ！霧島さんのスカートが捲れているっ！』

『なにいっ！？』

明久が雄一達と合流するために時間を稼いでいるみたいだ。  
この学校って実はFクラスに限らず皆馬鹿なんじやないのだろうか。

ガシャアアーン！

窓が割れたような音が聞こえた。

『な、なんだ！？なに！？』

『うわっ！島田さん！そんな物をビリする気だよ！』

島田に罪をなすつづけるなよ。

ブシャアアツ！

何かが噴き出す音。

『う、うわっ！なんだ！？』

『ペッペッ！じつや消火器の粉じやねえか！』

『前が見えない！』

『島田さん何はなんじことを！』

『Fクラスの島田め！なんて卑怯な奴なんだ！』

『許せねえ！彼女にしたくないランキングに載せてやるからな！』

『やうだ！在学中に彼氏の出来ない状態にしてやるー。』

『・・・でも、男らしくてステキ……。お姉さま……』

明久にあげる予定の弁当の中身をこよなくやくだけに変えてやること

にした。

ついでにダイエットῆー。

『だあああつー。』

シユワア アア

恐らくスプリンクラーだろう音が聞こえてくる。  
消火器の粉でも落とすために作動したのか？

『くつ！此処は退くぞー！全員遅れるなー！』

Dクラスの隊長らしき人の声が聞こえた。  
どうやら撤退するようだな。

『深追いはするな。俺達も明久の部隊を回収したら一寸もどらぬぞ。』

雄一達が合流したから相手が逃げたのか。

『さて、無事なようだな。明久。』

『うん、まあね』

そうして荒れに荒れた戦闘は一時停戦した。

明久達がFクラスに戻ってきた。

「明久、よくやつた。」

雄一が「がらしくもない言葉を口にした。明久を素直に褒めるなんて、どうこう風の吹き回しだ？」

果てしなく晴れやかな笑顔だった。むかつくくらいに。

「校内放送、聞こえた？」

「ああ。バツチリな。」

雄一。お前どうだな。

「雄一、須川君がどこにいるか知らない?」

「もつすぐ戻つてくるんじゃないのか？」

「明久。両手に持つてゐる包丁とすんごい重そうな靴下はなんなんだ。」

「やれる、僕なら殺れる……。」

「殺るなつての。」

明久が壊れている。目に光がないぞ。

「ちなみに、だが――あの放送を指示したのは俺だ。」

「シャアアアアアッ！――」

明久が鋭く踏み込みコンパクトに包丁を避けにくく致命傷になりやすい肝臓に向けて突き出しながら、右手に持っている鈍器（靴下に砂かなにかを詰めているようだ。）を死角となる雄一の頭に振りかぶり……

つておい！？

「ちょ、ちょっと待て明久。落ちつけ！」

「放してっ！ナル！僕は雄一を殺さないといけないんだ！」

「駄目だ！今雄一がいなくなつたら戦争はどうするんだ！殺るならAクラスを倒してからにしろ――。」

「おい、ナル。さりげなく俺を殺す許可を『』ねえんな。」

雄一に襲いかかる明久を後ろから羽交い締めにして止めて説得を試

みる。

「…………分かつたよ。ナルに免じて」の場は許してあげる。」

「さて、馬鹿は放つておいて、そろそろ決着をつけるかな」

「無視をするんじゃない——放して——ナル——今度こそ雄一  
を殺さなきやいけないんだ！」

「気持ちは痛いほど分かるが、今だけは黙口だ！」

「おひしゃーロクラス代表の首を取りに行くぞー！」

『おひしゃー』

「やうじやな。あらまうりと下校しておる生徒の姿も見え始めたし、  
頃合ごじやうひ。」

「…………（ゴクゴク）」

雄一もいちいち明久の神経を逆なでするような事はしないで欲しい。  
明久も毎回やり返そとするなよ。

明久が落ちついてきたので放してやった。

「雄一め……絶対戦争が終わつたら靴下を口がさけるまで詰め込みま

くつへやる。」

「グロいからやめてくれ。想像しちゃつたじゃないか。とりあえず

「俺達も行こ。」

「分かったよ。」

そして俺たちは遅れて廊下に出る。下校中に生徒に混じって戦闘を行っている両軍を見つけた。

「下校している連中でうまく溶け込めー取り囲んで多対一の状況を作るんだ！」

「雄一のはっきりした声が響き渡る。

「やつちから回り込めー俺はコマイツに数学勝負を申し込むー。」

「なら俺は古典勝負を——」

「日本史で——」

俺のクラスの皆がDクラスの連中を取り囲んでいる姿がそこら中に見てとれる。

下校中のドサクサに紛れて敵に近づき、取り囲んで打ち取るところじするこ作戦だ。

『Dクラス塙本、打ち取つたり！』

一際おおきな声が上がる。敵の部隊長をつまみ討ち取ったようだ。各クラスのHRも終わって、先生たちを捕まえやすくなつたおかげもあってこの作戦はうまくいっている。

「援軍に来たぞ！もう大丈夫だ！皆落ち着いて取り囲まれないように周囲を見て動け！」

あれはDクラス代表の平賀か。

「Dクラスの本隊だ！ついに動き出したぞ！」

ウチのクラスの誰かの声が聞こえる。これでこの廊下には双方に主戦力が集つてることになる。

「本体の半分はFクラス代表坂本雄一を獲りにいけ！他のメンバーは囮まれている奴を助けるんだ！」

『おおー！』

平賀の号令の下、あつという間に雄一の周りがDクラスメンバーで囲まれる。

雄一も周りに本体がいるからそういうやられはしないだろう。

「Fクラスは全員一度撤退しろ！人込みに紛れて攪乱するんだ！」

相変わらずよく聞こえる雄一の声。

確かに状況はよくない一度退くべきだろう。しかしその命令は作戦の合図が混せてあるカモフラージュだ。

「逃がすな！個人同士の戦いになれば負けはない！追いつめて討ち取るんだ！」

個々の実力に勝るDクラスだからこそ取れる作戦。  
見れば本体の人たちも分散し、追討にかかりっているみたいだ。その分、平賀の防備が薄くなっているが、平賀はDクラス代表。つまり

もつとも点数が高かつた人。Fクラス相手なら取り囲まれない限り負けはない。この戦力が分散した状況でその判断は正しいと言えるだろう。

俺がいなればな。

「チャンスっ！向井先生！Fクラス吉井が――――――

明久が正面から平賀の首を獲りに行つたが近衛部隊に阻まれた。

「Dクラス玉野美紀、サモン」

「なつ！近衛部隊！？」

「残念だつたな、船越先生の彼氏クン？」

勝ち誇つた顔の平賀。

「ち、違うアレは雄一が勝手に」

「そんなに照れなくてもいいじゃないか。さ、玉野さん。彼に祝福を。」

「分かりました。」

玉野は既に古典の点数で武装した召喚獣を呼びだしている。

「ちくしょーーあと一步でDクラスを僕の手で落とせるのこーー！」

「何を言つたと思えば、彼氏クン。いくら防衛が薄く見えてもさすがにFクラスの人気が近づいたら近衛部隊が来るに決まっているだろう?ま、近衛部隊がいなくてもお前じや無理だらうけど。」

平賀がフンッと鳴らして明久を一瞥した。

明久がムツとしてから対抗して、片目をつむって応えた。

「それは同感。確かに僕では無理だらうね。だから――」

もつたいでぶつて一息入れて

「ナル、よろしくね?」

「は?」

平賀からナル?誰の事だ?何をいつているんだ?といった感じの声がする。

俺は下校中の奴らに混じる為にカバンを持っていたためFクラスと思われることなく、簡単に平賀の後ろに立ちまわれた。

そして俺は平賀の肩を後ろからトントンと叩いてあげる。

「やあ。」

「え? や、やあ、どうしたの? 秋本、AクラスやBクラスはこの廊下を通らなかつたと思ひけど。」

未だ現状を認識できていない平賀。

「いや、そうじゃない。――」 Fクラス、秋本奈留。Dクラス  
平賀に現代国語勝負を申し込む。「

「…まあ、どうも。」

「サモン!」

『Fクラス 秋本奈留 現代国語 212点』

VS

『Dクラス 平賀源一 現代国語 129点』

「え? あ、あれ?」

戸惑うながらも平賀も召喚獣を構えさせ、相対する。俺の召喚獣の武器はハルバード。所謂、斧槍だ。

殺傷能力が高いんだよなこれ。

ていうか召喚獣の武器によつても強さ変わるんだよね。同じ点数として木の棒と鉄の剣とじや倍ぐらい与えられる威力が違うし。

その武器のランク決めは入学してから最初の試験の時の点数で決められているらしい。

「悪いな。俺たちも必死なんだよ。」

そういうつて相手の反撃も許さず、召喚獣の頭を跳ね飛ばし、この戦いの決着となつた。

## 第五話（後書き）

後書き その武器のランク決めは入学してから最初の試験の時の点数で決められているらしい。

はオリ設定です。

## 第六話

バカテスト／物理

### 【第四問】

問 以下の問いに答えなさい。

- 『（1） $4 \sin X + 3 \cos 3X = 2$  の方程式を満たし、かつ第一象限に存在するXの値を一つ答えなさい。

（2） $\sin(A+B)$  と等しい式を示すのはどれか、? ? ? の中から選びなさい。

- ?  $\sin A + \cos B$       ?  $\sin A - \cos B$       ?  $\sin A \cos B + \cos A \sin B$

姫路瑞希・秋本奈留の答え

『（1） $X = / 6$  （2）?』

教師のコメント

せつですね角度を『。』ではなく『』で書いてありますし、完璧です。

## 土屋康太の答え

『（1） $x = \text{およそ}?$ 』

## 教師のコメント

およそをつけて誤魔化したい気持ちも分かりますが、これでは回答に近くても点数をあげれません。

## 吉井明久の答え

『（2）およそ?』

## 教師のコメント

先生は今までたくさんの生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです。

## 木下秀吉の答え

『（2）およそ?』

## 教師のコメント

もう一人いましたね。

Dクラス代表 平賀源一 討死

その報せを聞いたFクラスの勝鬨とDクラスの悲鳴が混ざり、耳をつんざくような大音響が校舎内を駆け巡った。

「凄えよ！本当にDクラスに勝てるなんだ！」

「いやで畠や卓袱台ともおせりがまだな。」

「ああ。アレはDクラスの物になるからな。」

「坂本雄一 サマサマだな！」

「やつぱりアイツは凄い奴だつたんだな！」

坂本万歳！

「ナルちゃん愛します！」

代表である雄一を褒めたたえる声がいたるところから聞こえてきた。さつきまで雄一がいた方を見ると、がっくりと頃垂れているロクラ

ス生徒たちの奥でFクラスの皆さんに囲まれている姿があった。

ラブ「ホール？聞こえません。（諦めた。）

「あー、まあ。なんだ。そう手放しで褒められると、なんつーか。

頬をポリポリと搔きながら明後日の方向を見る雄一。照れているなんて意外だな。

「坂本！握手してくれ！」

「俺も！」

もう英雄扱い。この光景を見るだけでどれだけ皆があの教室に不満を抱いていたが分かる。そりや嫌だろうな…………ブルルッ！またあの光景を思い出した……言わなくてもわかるだろう？

そんな中、明久が先ほどの恨みを晴らすためか、Fクラスの面々に混ざりながら雄一のところに行つた。

「雄一！」

「ん？ 明久か。」

雄一が明久の方に振り向く。そこに颯爽として明久が駆け寄る。

「僕も雄一と握手を！」

明久は手を突き出した。

ガシイツ

「雄」……………ぢつして握手なのに手首を押さえるのかな……

「押さえるに決まつてこるだらうが……………フンシ…」

「ぐあつ…」

明久の手首が捻りあげられ、たまらず悲鳴をあげ、握りこんでいた包丁を取り落としてしまう明久。

「……」

「……」

「雄」、皆で何かをやり遂げるつて、素晴らしいよね。

「……」

「僕、仲間との達成感がこんなにもいいものだなんて、今まで知らな関節が折れるよつに痛い…！」

「今、何をしようとした。」「

「も、もちろん、喜びを分かち合つ為の握手を手首がもげるほどに痛い…！」

「おーい。誰かベンチを持ってきてくれー！」

「す、ストップ！僕が悪かつたー！」

「……チツ」

明久が手首を解放された。ものすごい痛そうだったな……。  
とこりかベンチなんて何に使う氣だつたんだ？

「…………生爪…………」

怖っ！高校生が考え付くような行為じゃない！  
そして明久が忠誠を誓うポーズをしている。

ホラ。エジプトの壁画にありそつた感じのポーズだ。

「まさか秋本がFクラスだなんて……信じられん。」

後ろから平賀の声。

振り向くとそこにはヨタヨタと歩きよる平賀の姿があった。実は平賀と俺は同じ中学校だったので、それなりに面識があるので。

「なんか騙し打ちみたいですまなかつたな。」

俺が平賀に謝る。別に悪いことをしたって訳じゃないが、俺はこう  
いう姑息な事はあまり好きじゃない。  
する必要があるなら躊躇うことなくやるけどね。

「いや、謝る事はない。すべてはFクラスを甘く見ていた俺達が悪  
いんだ。」「

これも勝負だからな。

平賀はこうやって自分の非はしっかりと認める輩なので、他のロクラス面子からの非難がほとんどない。

本来、クラス代表は勝てば英雄として崇められるが、負ければ戦犯として扱われクラスの面子に恨まれるのだが……人徳つてやつだな。

「ルールを則つてクラスを明け渡そう。ただ、今日はこんな時間だから、作業は明日で良いか?」

「もちろん明日で良いよね、雄一?」

「いや、その必要はない。」

明久がそう雄一に問うと、俺も予想しなかつた返事がかえってきた。

「え? なんで?」

「Dクラスを奪う気はないからだ。」

それは当然のことであるかのように告げる雄一。俺は雄一の言つことがすこし分かったかもしねえ。

「雄一、それはどういうこと? 折角普通の設備を手に入れることができたのに。」

明久の言つともわかるが、俺たちの目的は悪魔でAクラス。ここでDクラスの設備を取つたら、その設備に満足してやる気が下がる人がいるかもしれないからだと俺は思う。

「忘れたのか？俺達の田標はあくまでもAクラスのはずだろ？」

「でもそれなら、なんで標的をAクラスにしないのさ。おかしいじやないか。」

明久……ミーティングの時に、戦争に慣れさせるためと勝つて士気を挙げる為、そして作戦に必要なプロセスと言つていただろう。プロセスが何かは俺も知らないので雄一だけが知つてているが。

「少しば自分で考える。そんなんだから、お前は近所の中学生に『馬鹿なお兄ちゃん』なんて愛称をつけられるんだ。」

リアルな[冗談]だなあ。

「なつ！そんな半端にリアルな嘘をつかないでよー。」

「おつとすまない。近所の小学生だったか。」

「……人違いです。」

「まさか……本当に言われた事があるのか……？」

「え……まじで？いや、いくらなんでもそれはないだろ？……？」

俺と雄一が驚愕して明久を可愛そうな顔で見てあげる。  
明久がすいべ悲しそうな顔をしている。

「と、とにかくだ。Dクラスの設備を一切手を出すつもりはない。」

「それは俺達にはありがたいが……。それでいいのか？」

「もちろん、条件がある。」

「そりやそうだな。」このまま解放したら意味がない。

「一応、聞かせてもらおうか。」

「なに。そんなに大したことじやない。俺が指示を出したら窓の外にあるアレを動かなくしてもらいたい、それだけだ。」

雄一が指したのはDクラスの窓の外に設置されているエアコンの室外機。

でも、この室外機はDクラスのではない。ちょっと貧しい普通の高校レベルの設備でしかないDクラスにエアコンなんてものはないのだから。

置いてあるのはスペースの関係でここに間借りしている――

「Bクラスの室外機か」

「設備をこわすんだから、当然教師にある程度睨まれる可能性もあると思うが、そう悪い取引じやないだろう?」

悪い取引であるはずがない。うまく事故に見せかければ厳重注意で済み、それだけで三ヶ月もの期間をあの教室で過ごすという状態から逃れられるのだから。

しかし、雄一がいつていたプロセスとはBクラスの室外機を壊すことなのか?直接戦争に関係のない物にダメージを与えてどうするつ

もりなんだろ？

「それはこいつらとしては願つてもない提案だが、なぜそんなことを？」

「次のBクラス戦の作戦に必要なんでな。」

「そうか。ではこいつらはありがたくその提案を飲まして貰う。」

「タイミングについては後日詳しく述べ。今日はもう言つていいだ。

「ああ。ありがとうございます。お前らがAクラスに勝てるよう願つてこるよ。」

「ははっ。無理するなよ。勝てっこないとおもつてこるだろ？」

「それはそうだ。AクラスにFクラスの勝てるわけがない。ま、社交辞令だな。」

じゃあ、と手を挙げて軽くなつた足取りでロクラス代表、平賀は去つて行つた。

「さて、皆一今日は御苦労だつた！明日消費した点数の補給を行つから、今日のところは帰つてゆつくつと休んでくれー解散！」

雄一が号令をかけると、皆雑談を交えながら自分のクラスへと向かい始めた。帰りの支度をするのだらう。

「雄一。僕らも帰らうか。」

「そうだな。」

勝てたという満足感が大きいが、正直疲労もかなりある。まだ戦争はつづくようなので、今日はもう帰りたい。

「あ、あのっ、坂本君！」

「ん？」

皆の後を追つて教室に向かおうとする雄一を呼び止める姫路。

「お、姫路。びっくりした？」

「実は、坂本君にききたいことがあります。」

胸に手を当てながら興奮気味に話す彼女。大事な話みたいだから。俺は席を外した方がいいな。

明久も俺と同じようなことを考えているようで田配せをしてきた。

「おひ。分かつた。」

そう答えると、雄一は姫路と一緒に俺らから少し離れたところへ話を始めた。

顔を見ると、姫路は

目をまっすぐに雄一を見ていた。俺たちのほうを一切見ずに。よほど大事な要件なんだろうか。凄く集中しているように見える。隣の明久みると、寂しそうな顔をしてから興奮している顔になつたり悩んでいたりと百面相をしていた。

「おい、明久。さっきからビーツたっていいんだ。」

「……へつー？姫路さんのスカートを捲り放題なのではー？なんて思つてないよー？」

「…………お前の性癖はよくわかった。いいか、俺に近づくんじゃないぞ？」「

「え？ああー？違うー！今のはつい僕の本能が表に出てしまつただけなんだよー！」

「つまりお前の本音じやないか。」

明久の性癖を理解している間にも続く一人の会話。

「さて。そう言えば、振り分け試験で何かあったみたいだが、それと関係があるかもしねー。馬鹿には馬鹿なりに譲れないものが

あつたみたいだが、それと関係があるかもしねー。」

茶化すように、愛嬌たっぷりの笑顔で答える雄一。どこか誇らしくうで楽しげだ。

「振り分け試験つて――それじや、やつぱり。」

「俺の口から言つて良い範囲はこれが限界だと思つが――多分、姫路の想像は間違つていないと思つた。」

「さて、明久、そろそろ帰るぞ。」

「あ、うん。姫路さんとはもうここにの？」

「ああ。これで決心も固まつただろうし、な？」

雄一が問い合わせると、ボンッと音が聞こえてきそうなほどに姫路さんの顔が真っ赤になつた。

さつきから明久の事をチラチラみてるが……ああ、明久に好意を寄せてるのか。

てことは雄一に何かを聞いていたがそのことに関じてのことかな？

「ふーん、そつか。よくわからないけど、それじゃ帰らつか、姫路さん、またね。」

「あ、はいーやすひならー！」

顔を赤くしたまま手をブンブンと振る彼女に見送られている明久と共に俺と雄一は教室を後にした。

．．．．．

「それにしてもさ。」

「ん？」

「ロクラスとの勝負つて本当に必要だったの？別にHABAコンペじゃなら他の方法でも壊せたと思つけど。」

「ああ、そのことが。」

帰り道。俺と明久と雄一は家の方向が同じだからよくこうやって一緒に帰っている。というか明久の家から50Mぐらい離れたところに俺の家がある。高校に入る頃ついでに家族念願の一軒家と土地を買い、引っ越しを済ませたのだ。

明久の家に近いのは完全に偶然である。しかし、だからといって朝、明久と一緒にに行くかということはない。

なぜなら、明久は朝起きるのがおそいし、起こしにいつてもすぐに起きないので一緒に遅刻してしまうからだ……なぜか明久はいつもギリギリ学校に間に合っているが、俺はそんな生活は御免である。弁当はいつも学校で渡している。

「理由はほかにある。クラスの皆を戦争に慣れさせる為だと、他のクラスにプレッシャーを与える為だと、自信をつけて士気を上げる為だとかな。」

「ふーん。それじゃ、Dクラスの設備を手に入れなかつたのは?」

「目的はあくまでAクラスだからな。Dクラスの設備を手に入れることで一部の奴らが満足して試合戦争に反対し始めるかも知れないだろう? そうならない為と、不満によるモチベーションを維持するためだ。」

さすが、雄一。こうして話を聞いていると、とても馬鹿だとは思えない。神童再び、って感じだ。

「Aクラスに勝てるかな?」

「無論だ。俺に任せておけ。」

「……ありがとう。ぼくのわがままの為に。」

「別にそんなわけじゃない。試召戦争はおれがこの学校に来た目的そのものだからな。」

雄一はテストの点数がそのまま召喚獣の戦闘力になる試召戦争で点数で劣るFクラスが知恵と体力でどうにかしてAクラスを倒すことで、勉強しなくてもトップになれるということを証明したいのではないのかと思う。

「目的の為にも、明久やナルにだつてきつちり協力してもうからな。とりあえず明日の補給テストで。」

「……ぐう」

とにかくで、俺や姫路は振り分け試験でテストを受けていないのになんて点数があるのだと思っている人もいるだろう。今更だが、もし振り分け試験を受けていなかつた場合。その前に受けた試験の点数を代用とされる。もちろん戦死で点数が無くなつた場合は、試験を受けなおさなければならぬが。

それに俺は召喚獣が傷つけられるまえに、相手を倒したので点数が減つていないので試験は受けなおさなくてもいい。

「ゲームばかりしてないで、寝る前に少しつらい勉強もしておけよ。

「

「俺は勉強なんて基本してないけどね。授業はまともに受けているだけ。」

「お前はそれでも勉強できるからいいだろ。明久は出来てはないからな。」

「はいはい。教科書ぐらには読んで……ん？」

明久が急に立ち止った。どうしたんだ？

「あー教科書、卓袱台の下に置いたままだつた！」

「…………あほ。やつをと取つてこい。」

「何故お前は毎回なにかボケをかまさなきやが済まないんだ。」

「うう…………、んじや、先に帰つていいよ。」

「おー。今日は疲れたから帰つてすぐ寝るわ。」

「もちろんだ。待つてるわけがないだろ。」

「わかつていたけど、雄一の薄情者。」

そのまま俺と雄一は雑談をしながら途中で別れて、家に帰宅した。

「ただいまー。」

「あー、おかげ。今日は遅かったわね。」

玄関で靴箱を整理している母親がいた。

「ウチの学校名物の試召戦争をしていたんだよ。」

「へえ、奈留の召喚獣みてみたいわね。召喚獣は本人の『デフォルメした姿なんですか？』

「まあね。とりあえず疲れたから寝るよ。夕飯が出来たら起こしてくれ～。」

「はいはい。」

こうして俺達の初の試召戦争を勝利し、一日が終えた。

## 第六話（後書き）

今回は恐らくつまらない回になりました。  
今日の夜、また次話を投稿します。

もし振り分け試験を受けていなかつた場合。その前に受けた試験の点数を代用とされる。  
はこれもまたオリ設定です。  
別に原作ブレイクするほどの事でもないですね？

## 第七話（過去編）（前書き）

過去編ですね。（番外かな？）

たぶん糞文になつた。というか糞文。

特に後半

## 第七話（過去編）

文月学園に入學し初の春休みでの出来ごと。

俺は家で惰眠を貪つていた

ブブブツ

All of us believe that this is  
not up to you —  
The fact of the matter is that  
it's up to me —

Hey! Hey! Hey!  
Hey! Hey! Hey!

Let's Go

枕の横に充電しながら置いてある携帯電話から着信電話が来て俺の  
好きな曲が流れ出した。

んう……誰だよ……ぐつすり寝ていたのに……

枕元においてあるはずの携帯電話を寝ながら音をたよりに手で探り、見つけて携帯を開いた。もう午後一時だった。

自分の起きる遅さに軽く驚きながら、気だるそつに電話に出る。

「もしもし……だれですか？」

寝起きのせいか、つい間の抜けたような声がでてしまつ。

「……康太。今日、今すぐ合コンに来て欲しい。」

ムツツリスケベの康太だった。合コン？ 今すぐ？

「……（やん）で合コン？ 今からあ……？ 眠いからバス……おやすみい  
……」

そう言つて俺は電話を切ろうとしたが止められる。

「待つて。来るはずの合コンメンバーが一人急遽来れなくなつて人  
数バランスが取れない。だから来てほしい。それに一時半に待ち合  
わせ」

康太にしては珍しく口数が多い。……仕方ない。親友の頼みだ、行  
つてあげよう。

この時の俺は寝ぼけてどうかしていた。まさかあんなことになるな  
んて――

「……家前にいる。お金はこっち持ち。」

「……家の前にいる。お金はこっち持ち。」

ええ……まじかよ……まあお金がそっち持ちなら構わないか……

俺は重い身体を5秒くらいかけて起こし、ベッドの横に置いてある

タンスから適当に服を取り出して着る。（ジーパンに長袖に上着）そして洗面所に向かい顔を冷水で洗い、運よく寝ぐせがほとんどつかなかつた髪の毛を櫛で軽く梳いてから髪を纏めボーネールにしてから「ゴムで止める。

顔を洗つたおかげで目が覚めた。

ここまで僅か5分ほどだ。我ながら素早い行動だと思つ。そして、母親に出かけることを伝える。ちなみに父親は仕事である。一応平日だからな。

「母さん、ちよつと友達と遊んでくる。」

「毎に起きてきながら急な話ね。お昼ご飯はどうするの？」

「外で食べてくる。お金は友達持つ。向こうが頼み込んだ来たんだから、それくらいいいでしょ？」

「仕方ないわねえ……いつていらっしゃい。ナル。」

「いってきます。」

そつ言つて俺は家から出る。そつ言つてた通り、康太が家の前で待つていた。

「ふわあああ……急に呼び出すなよ康太。折角ぐつすりと寝ていたのに。」

「…………（パシャパシャッ）」

「ん?なんかした?」

「……なにもしていない。（ナルのあくびしている写真く若干涙目へがうまく撮れた。）」

なんか音が聞こえた気がするが気のせいか。まだ寝ぼけているのかな？

「やうか…ところで何処にいくんだ？でか合コンって俺は彼女とか作る気はまだないぞ？」

ほら、なんか恥ずかしいじゃん？分からぬい？そうですか。

「…………彼女？彼氏の間違い？」

「親友といえども本気で殴つても良い時があると思うんだが、そことこどつ思ひっ。」

「…………つー…………すでに殴つている人の言葉じゃない。」

おっと。もう一人の俺がいつのまにかにゲーセンにあるパンチングマシンで最高得点を叩きだした。俺の自慢のボディブローを康太にかましていた。

すまない。悪気はなかつたんだ（笑）

「…………この近くにあるガス 。」

「ふうん……そういうば合【】って初めていくな。会話をするだけでいいのか？」

「大体そんな感じ。」

そんなやり取りをしてから康太が何も言わず歩きだした。  
俺はガトへの道を知らないので、康太について行く。

．．．．．

ガストに一時二十五分で着いた。

一応待ち合わせ時間までに着いたようだ。そして俺達は店内に入り、康太がキヨロキヨロと周りを見渡していると誰かに呼ばれた。

「おーい。ムツツリーー、こっちだ。これで全員そろつたな……秋本もよく来てくれた。これで男女のバランスが合つ。」

須川が呼んだようだ。そういうえばメンバーとか人数を聞いていいなかつたな。

男子の面子を見てみると、須川亮、根本恭二、ムツツリーー、そして俺だ。

対する女子は、小山友香、一年の終わりころに転校してきた工藤愛子に玉野美紀、木下優子に木下秀吉がいる……ん？

「おい、秀吉。なんで女側にいるんだ。お前がいるのなら俺いらなかつたんじゃね？」

「おお……ナルか。実は姉上が恥ずかしいからアナタも来な——どうしてワシの腕をつかむ？あつ、姉上つ！ちがつ……！その間接はそっちには曲がらなつ……！」

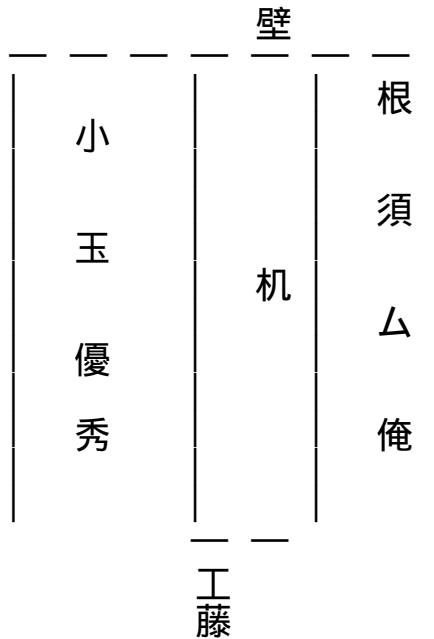
「貴方は余計な事は言わなくていいのよー!」

店の中で暴れるな。

とりあえず、すでに合コンメンバーは全員待ち合わせ時間までに全員集まっていたようだ。

それとこの面子はどうな関係で集まつたんだ。バラバラすがるや。しかも、全員文月学園の一年生だし。

ちなみに席の配置はこんな感じだ。



「さて、全員集まったことだし知つていい間柄もいるだろ? うが、自己紹介からはじめようか?」

須川が場を仕切って言った。

「言ひだしつべの俺から自己紹介をするよ。俺の名前は須川亮。誕生日は\_\_\_\_\_で、趣味は中華料理に関する研究、料理をするのが好きだ。順番は時計周りにしようか。」

「……土屋康太。特技は情報操作と隠密行動。」

「おい。合コンでその紹介ってどうなんだ?色々アウトだらう。つと。次は俺か。須川の紹介を真似れば問題ないかな?」

「俺は秋本奈留。誕生日は3月2日。趣味は音楽を聴いたり歌を歌つたりするのが好きだ。音符は読めないけどね。他には身体を動かすのと、動画サイトで面白い動画を探すのが最近の趣味かな?」

「へえ、音楽好きなんだ?私も最近洋楽にハマっているんだよね~。あ、そうだ!ご飯食べたら皆でカラオケに行かない?」

工藤の容姿は一言でいうとボーリッシュだ。だからといって決して女に見えないというわけではないが。むしろ、可愛い。そして工藤がカラオケに行かないかと皆に提案した。

「ふむ、たしかにカラオケは面白そうだな。俺は賛成。皆はどうだ?  
?」

須川が賛成して皆の意見を聞く。

「俺も構わないぞ。」

「私も構わないわ。」

「あ、えっと……私も構ないですつ」

「…………問題ない。」

「俺はむしろ行きたいな。」

「ワシも構わんぞい。」

「あ……えいと…………。」

根本から順に小山、玉野、工藤、康太、俺、秀吉、優子の順に答え  
た。

才下(如)が何故か言い渢んでる  
歌が苦手とかなのかな?

「どうした。木下さん。何か都合が悪かつたりしたか？」

そんな木下（姉）に質問をする須川。

「つづ……！」いえ、問題ないわ。私も賛成よ。

じゃあなんで言い淀んだんだろう？まあいいか。

「じゃ、後で行こー……つあ、ごめんね。自己紹介の流れを止めちゃつて。」

「いや、構わないさ。次、工藤さんだぞ？」

「うん、ボクは工藤愛子。特技は保健体育、特に実技だよ！趣味はさつきも言つてたけど、洋楽が最近の趣味。誕生日は――だよ！」

工藤、特技のところがおかしい。  
なんだ実技って。なんで得意なん  
だ。未成年だろ？。

「…………つーー（ブツ———）」

康太が女子に見られない為に机の下に潜つて鼻血を出した。

「へちよつ、康太！大丈夫か！？ほれティッシュ！へ」

「…………（ツメツメ）へ助かった。へ」

鼻血の出る勢いがおかしい。下手な水鉄砲より勢いがあつたぞ。康太は鼻に詰めたティッシュが見えないよう奥に詰めている。

「次はワシじやな。ワシは木下秀吉。特技はモノマネと演劇。趣味も演劇じや。誕生日は\_\_\_\_\_じゃ。」

「私の名前は木下優子。趣味は小説、主にラノベを読んでいるわ。誕生日は\_\_\_\_\_よ。」

「玉野美紀です。趣味は優子さんと同じ小説です。ラノベではなく、歴史関連の小説ですが。誕生日は\_\_\_\_\_です。」

「小山友香よ。趣味はドラマや映画、推理小説も好きね。誕生日は\_\_\_\_\_よ。」

「根本恭一。好きな事は、勝負事に勝つことだ。あの勝った時の達成感がなんともいえないな。誕生日は\_\_\_\_\_。」

各自の自己紹介も終え、食べ物を注文して。今は料理を待っている状態だ。

「ところで女が6人つてバランス悪くないかしら？」

小山が馬鹿なことを言い出した。お前の目は節穴だ！

「何を言つんだ。男が5人の間違いだらう？」

俺がそう反論すると。

「？？男は土屋君と須川君と根本君だけでしょ？」

「……秋本と秀吉は男。」

俺と秀吉は机に突っ伏して涙をながして嗚咽をこぼしていた。

「ええ！？秋本さ……君と木下君って男だったの！？」

「本当！？ボクより女っぽいのに！？」

「男なのに女の私より可愛いなんてずるいです！」

「貴方も男だったの！？秀吉と同じような存在が一人もいるなんて

……

「なにい！？（なんてことだ！秋本を狙っていたのに！）」

小山さんから始まり工藤、玉野、木下（姉）、根本の順だ。  
康太と須川以外誰も俺の事を男だと分かつてくれていなかつた！  
(しかも二人とも同じクラスだつた。)

「……秀吉。お互ひ頑張ろうな。（ガシイツー）」

「ナル……！」（ガシイツ…）

俺と秀吉は友情といひ名の絆をさらに深めあい手を握り合つた。そんな事をやつていろひに注文した料理がやつてきた。

「お、やつと来たよひじやの。」

「一気に全部来たな。」

普通一つずつ持つてくると思うが細かいことはどうでもいいや。

「じゃあ、いただきまーす。」

「「「「「「」」」」いただきまーす。」「「「「」」」」

「ねね、私は文月学園に最近転校してきたんだけどさ、皆はなんで文月学園に入学したの？私は親の仕事の都合でこの辺に引っ越ししてきて、最近有名な文月学園の事を知ったから、どんな学校か調べてみたら色々、面白そうな学校だつたから入つたんだよ。」

工藤が話題を持ち出してきた。

明るく話しやすい性格の彼女のおかげで会話が途切れず、氣まずい空氣などが出来ずに楽しく会話が進んでいる。

「俺は、学校の偏差値が高く大学進学率が高い高校なのに合格しあすいというかなり良い学校だつたからだな。」

「ワシもじや。」

「俺は第一志望の高校に落ちて第一志望の文翔学園に合格したからだな。今となつてはこっちに入つてよかつたと思っているがな。」

須川と秀吉は同じ理由で根本にとっては滑り止めだつたらしい。

「私は自分の努力次第でどこまでも点数があがる方式をとつていてることに興味を持つたからだわね。」

木下姉は優等生と聞いているがたしかにそれっぽい台詞だなあ。

「私は根本君の逆で正直入れると思つていなかつたんですが、合格してしまつたので入りました。」

「近いからという理由で私は入つたわ。」

「…………黙秘権行使する。」

「俺は召喚獣システムとやらがどうしても見たくてな。それに祭りなどのイベント関連が楽しそうな学校だつたからだな。」

玉野、小山、康太、俺の順。

皆それぞれの理由があるが、こつして話し合つてみると結構理由が違つたりするんだな。

あと康太、なぜ黙秘する必要がある。

そんな感じに雑談をしながら過ごしていく。というかこれって合口についてただの雑談場じやない？

「ふう、皆食い終わつたようだな。会計を済ましてカラオケに行こうか。」

須川がやはり仕切る。以外とリーダー性があるんじゃないかな?

会計をすまし、近くのカラオケ店に集団で行く俺達。

なんか木下姉弟がすこし後ろの方で話しあっているがどうしたんだ  
ろうか？

「秀吉、私が歌が苦手なのはしてるでしょ？だから私とすり替わつてよ！私は秀吉として帰るから。」

「指揮なり指揮どこへぞれこじめや。」  
何故この命令を出しねば

「いいから！黙つて私の振りをしてればいいのよ！カラオケ店についたらトイレなりなんなりと誤魔化せばいいのよ！当然、服も交換だからね！」

「くむ、 むう…仕方ないのう…」

カラオケ店についた俺達。

「何時間にしようか？」

「ん~今は3時だから……この人数だから四時間くらいでいいんじゃないかな?」

どのくらいカラオケで歌うか皆に意見を求める須川それに答える玉野。

「ふむ、妥当なところだな。4時間にしよう。皆、金は足りるか  
——あれ?秀吉はどうした?」

「ああ、秀吉ならさつき急な用事が出来たって『本当にすまないの  
じゃ』って言つてから帰つて行つたわよ。」

「むう、そうか。それなら仕方ないな。」

皆金が足りたので須川が皆から金を受け取つてカラオケの受付に行  
き部屋を借りた。

「何の歌を歌おうかなー」

皆、順番に歌う曲を決めていく。

根本、俺、工藤、ムツツリーーー、小山、玉野、須川、木下(姉)の  
順で歌うことになった。

一番目は根本からか。

マキシマム ホルモンのWhat's Up, people? !  
を歌うようだ。まじかよ……

便利便利万歳 便利便利万歳 便利便利万歳 人間  
便利便利万歳 便利便利万歳 便利便利万歳 人間  
ほらビリビリ怒らすか？ ビリビリ怒らすか？ ビリビリ怒らすか  
？ 人間  
ほらビリビリ怒らすか？ ビリビリ怒らすか？ ビリビリ怒らすか  
？ 人間  
しかもテラつめえ。

そして根本が歌い終わり、

「すごいよ！？ 根本君本物とそっくりだつたんだけど！」

「これは……意外な特技ね。」

一番手は俺の off spring の All I want だつた。

Y a    y a    y a    y a    y a

Day after day your home life's  
a wreck  
The powers that be just breath  
e down your neck  
You get no respect, you get no

relief

You gotta speak up and yell out  
your piece

So back off your rules

Back off your jive

Cause I'm sick of not living

To stay alive

Leave me alone

I'm not asking a lot

I just don't want to be contro-

lled

That's all I want

That's all I want

That's all I want

That's all I want

Ya ya ya ya ya |

「秋本君もうま！何？次私なんだけど絶対クオリティの差が激しくて盛り上がらないよ！？」

まあ、こんな感じに皆の持ち歌を歌っていた。

工藤さんは二口「動画にあつた。おちやめ機能を歌っていた。  
似合いすぎなんだが……」

ムツツリー二は何故かHBBしかやらなかつた。  
口で「ボンスカチュカチュカスカチュカボン」などと鳴らすやつだ。  
歌えよ。

小山さんはまさかの演歌だった。  
かなりしぶかつたです。

玉野さんは普通の歌、「翼を下ろい」とかを歌っていた。決してうまいといつわけじゃないが、なんか雰囲気が和んだ。

須川はY.O.Hはショック！みたいな熱血系の歌を歌っていた。  
とても暑いです。いや熱いです。

木下姉はといふと……もつてけセーラー服を歌っていた。  
いわゆるオタク系だ。  
しかも妙にうまい。皆少し引いていた。

「もう時間か。一人4～5回しか歌えなかつたな。」  
「…………疲れた。」

「そうだね～歌つた回数自体は多くないけど、楽しく過ごしていた  
からか大分疲れたよ。」

そして部屋から出て受付に皆でお金を払い、小山と須川、俺と根本、  
木下（姉）と玉野と康太、の三つに分かれてそれぞれ帰宅した。  
そして俺達の合コンは終わった。  
のだが……

side 小山

もう七時ね。中々楽しめた合コンだったわね。  
ただ遊んでいるだけのような気もしたけれど。

「オカザイルってまた人数増えてるわよね。知つてた?それにしても14人の岡村とか、よく集まつたわね」

「えつ7人から増えたのか?どんだけ増えるんだよオカザイル。」

「そここの姉ちゃん待ちなよ。」

「誰?いきなりなんなのよ?ナンパ?」

「なあ、姉ちゃん俺らと遊ばない?こんなぼつ男なんてほつとい  
さあ。」

二人組の男達の片割れが須川君に近づき。

ドンッ

須川君が思いつきり押されたので地面に尻もちをつく。

「なつー！やめなさいよー！大体私はもう帰るのよー！貴方達となんて遊ぶわけないじゃない！」

「ああ？いいんじゅん。すこしふくらい付き合つてくれたつてもあ。」

「おーー！やめのよー！」の肩どもがーーー！」

須川君が一人組の男たちを罵倒し、その片割れの顔面にストレートを放つた。

そして殴られた片割れが逆上しナイフを出してきた——え？

「キ……キヤアアアアアアアアーーー！」

side 秋本

キヤアアアアアアアアーーー！」

「ーーー？今のって小山の声か？」

「俺も小山の声に聞こえたが・・・」

「須川もいるはずだが…あいつら向こう側の方から帰つてたよな?  
様子を見に行こひー。」

「ああ……！」

俺は根本に確認を取つてから、俺達は悲鳴の聞こえたほうに走る。

2～3分も探すと小山さん達が見つかった。

知らない男の一人が小山さんを組みふせて口を塞いでいて。もう一人の男が須川にナイフを刺そうとしている様子が見える。

俺は小山さんのほうを助けに行き、根本が須川を助けに走つた。

俺は小山さんを押さえつけている男を後ろから、脇腹を蹴り飛ばして氣絶させてやつた。ボキッという音が聞こえたので骨が折れたかもしれないが犯罪者の骨などいくら折れたとしても俺の良心には響かない。

根本はナイフを持った男を後ろから羽交い絞めにし、須川が身動きをとれるようになり、須川が自分を刺そうとしていた男のナイフを奪い取つてから腹にアッパーを食らわせた。

男はどうやら気絶したようで全く動かない。

「大丈夫か?須川、小山。」

「何があつたんだ?」

須川達に状況を聞く。

「まじかよ。とにかくこの辺にこんな奴がいるなんて思わなかつたな。」

「この周辺は非常に治安が良い事で有名なのだが……

「ふん、やるならもひとつばれない」とさぢやるべきなんだよ。」

根本。そもそもやることすら黙田なんだよ。  
！！根本後ろ！

「根本！後ろ！」

「ん？ つがーー？」

須川が氣絶させたと思っていた男が立ち上がり根本を後ろから頭を殴つた。

「こんの糞ガキヤア、ガツー！」

須川がもう一度腹にボディブローをかまし今度こそ氣絶させた。  
また実は氣絶してないとだつたら怖いので。一応俺がもう一度全力で腹をけとばしてから根本に声をかける。

「根本！大丈夫か、頭から血が出てるぞ！」

「だ、大丈夫だつ。（ちょー顔近いー！）」

根本は頭を殴られたから血を流してゐるではなく倒れた際にアスファルトの地面に頭をぶつけたのが原因だろう。俺は持つていたハンカチを根本の頭に押さえつける。

「つづーいってえ・・

「目眩とかしないか?」

「つづー・・・ツダダダダ大丈夫だ、問題ない。（ブイツ）」

むう、大丈夫ならなんで目をそむけるんだ。大丈夫じゃないって言つてるようなもんじやないか。

とりあえず警察を呼んだ。犯罪者とはいえ骨を折つてしまつたので一応救急車も呼ぶ事にした。

事情聴取で20分程時間をとられたがすぐ帰る事が出来た。念のために根本も病院に運ばれた。

side 根本

「根本！後ろ！」

「ん？つが！？」

どうやら俺は後ろから殴られたようだ。つち油断した。俺もナイフ

で戦つてやるうか？

そう思つていたら須川が俺を殴つた奴を倒していた。

「根本！大丈夫か！？頭から血が出てるぞ！」

ちょ！顔が近い！しかも秋本のサラサラな髪が俺の鼻をくすぐる。いい匂いだ。  
じゃなくて！

「だ、大丈夫だっ」

大丈夫と言つているのに秋本は自分のハンカチを俺の頭にある傷を押さえる。

「つづ！いつてえ・・・

「眩とつかないか？」

「つづ！……ッダダダダ大丈夫だ、問題ない。（ブイツ）」

秋本のやつかなり心配そうな顔で見つめてくる。……かわいいじゃないか！糞！

つい、恥ずかしくなつてしまい顔を背ける。  
やさしくてかわいいとかかなりの優良物件じゃないか。

女じやなかつたからさつきは諦めたが、案外男でもかまわないかも

つは！何を考えているんだ俺は！俺はホモじゃない！ホモじゃないんだ！

そんな事を考えていると俺の言葉を信じていないのか、今度はムツ

とした顔で俺を見てくる。

ぐふおお！？

さつき殴られた痛みよりダメージが！！

考えてみれば性別なんて些細な問題だぜ！ヒヤツハー！

根本 side nd

side 小山

まさか自分がこんな事件に巻き込まれるなんて思わなかつた……

「おい、小山さん怪我はないか？」

須川君……自分のために身体を張つて守りつしてくれた人。

「小山？」

「……えつ？あ、だ、大丈夫よつ！…！」

「そうか、よかつた。」

須川が満面の笑みでこちらをみながら言つてくれる。決して美形とかではないのだが何故か恰好よく見える。そして顔が赤くなる。今まではそんなことはなかつたのに、何故なんだろう・・・？

「ところで小山。」

恋？いやそんなことはないはず。自分は頭がいい人が好きなのだ。  
須川はむしろ頭が悪い部類に入るだろう。そんな人を好きになるはずがない。

だがしかし、好きでないのなら、それでは今のこの自分の気持ちは  
一体……

「付き合つてくれ」

えつ。えつ――――――――?

「え、あ、その、黙田よ――!」

「そんなバカなあああああああ――!」

須川が泣きながらどこかへ去つて行つた。

いきなり付き合つて宣言をされてつい、反射的に断つてしまつた。  
今、自分は何故かものすごい顔が熱く胸がドキドキしている。

いや、私は自分の気持ちを誤魔化してはいけない。やはり自分は須

川の事が・・・

あれ?なぜか私、損した気がする。

好きな男性の告白を断つた?

あつ・・・・・・・・・・

小山  
side  
end

## 第七話（過去編）（後書き）

一応この話で次のBクラス戦の内容が原作と変わるのはですが、そんな必要なつたですかね？

オリジナル性が全くないのも問題だと思つて付けくわえたんですが

その結果がこれだよ！

根本真人問じやん！

須川主人公属性まざつちやつてるじやん！

玉野さん影つすすぎるじやん！

ムツツリーー（以下同文じやん！）

工藤さんも似たようなもんじやん！

木下姉弟も（ry

やつぱりこりないかな？

その辺の意見感想で送つてほしいです。

1、このまま続ける

2、いろんなストーリーいらぬ。藝文ノ。普通に原作道理にやれ。

（つまりこの第七話を消して普通に書く）

よろしくお願ひします。

期限はんーなんとなく明日の12時まで。（早すぎるかな？）

## 第八話（前書き）

アンケートの結果第七話は消さずに採用されることになりました。  
答えてくれた方々ありがとうございました。

## 第八話

Dクラス戦に勝った翌朝、いつも通り学校に向かい、Fクラスに入り席に座る。

「おはよー。秀吉。」

「おはようなのじや、ナル。今日はテスト漬けじやから頑張らねばの……」

秀吉がすこし疲れたような表情をする。

そう、今日は試験戦争で消費した点数を補給する為にFクラスの皆はテスト付けなのだ。しかし、俺は点数を消費していないのでゆっくりできる。

「アハハ…まあがんばれ。俺はする必要がないけどな。」

ガラガラ

「おはよー」

「おう明久。時間ギリギリだな。」

俺が来て、少し遅れてから入ってきた明久。

「ん、おはよう雄一。」

雄一は英語の教科書を持っている。一応テスト前の悪あがきをして

いるようだ。

「皆には何も言われなかつたの？」

「ん？ 何がだ？」

「Dクラスの設備の事。」

ああ、そういうえばDクラスの設備はいらないと雄一が言つていたな。たしかに、折角勝つて手に入るはずのDクラスの設備を手放したのだ。クラスの奴らに理由も言わずに勝手にそのような事をすれば不満がでるというのも必然というものだ。

「ああ。皆にもきちんと説明をしたからな。問題ない。」

「ふーん。」

いつ説明したんだ？ ああ、俺らが来る前にいついたのかな。皆が素直に聞いたのならば、それは昨日の雄一の働きを評価しての事だろう。もつと上を狙えると分かつた以上、Dクラス程度の興味がないといったところだろうか。

「それよりお前はいいのか？」

「何が？」

「昨日の後始末だ。」

ああ。島田と船越の件のことか？  
きっと明久に明日はない。

「うん。 いくら僕でも、生爪を剥がされると分かつていながら行動するなんてありえないよ。」

「いや、俺の始末じゃなくて。」

明久が雄一の始末と勘違いしている。

「一体何がいいたい————」

「吉井つー。」

「いふあつー。」

明久の台詞が突然の島田の鉄拳制裁によつて遮られる。

「し、島田さん、おはよー。……」

「おはよーじやないわよー。」

「アンタ、昨日はウチを見捨てただけじゃ飽き足らず、消火器のいたずらと窓を割った件の犯人にしてあげたわね……！」

明久があ、そつか。と思つてそつた顔をしている。

「おかげで彼女にしたくない女子ランキングが上がっちゃつたじゃない！」

代わりにお姉さまになつてほしいランキングNO、1じゃなかつたつけ？

島田も中々不憫だな。

「——と、本来は掴みかかっているんだけど。」

島田が急に冷静さを取り戻す。

掘る前に殴つているから大差ないんじゃないか？

「アンタにはもう充分罰が与えられているようだし、許してあげる。

4

「うん。さっきから鼻血が止まらないんだ。」

「いや。もうじやなくへね。

「ん？ それじゃ何？」

「一時間目のテストだけど。」

島田が樂しきつゝ、本当に心から愉しきつゝが珍ら。

「監督の先生船越先生だつて。」

明久が血相を変えて教室から飛び出した。

.....

「うあー……づかれたー

机に突つ伏す明久。

朝から船越先生とひと悶着起こしてさうに、四教科ものテストを終わらせたのだ。そりや疲れるだろつ。

明久いわく近所のお兄さん（三十九歳／独身・・・お兄さん？）を紹介し、昨日の事もその事だという事にして、争いを避けたそうだ。

「うむ。疲れたのう。」

「お疲れ。ほれ、弁当だ。コーラもやるよ。」

俺は明久の分と自分の弁当を持つて。さりげなく明久に近づき俺と秀吉が答えた。

今日は秀吉も髪をポニーtailにしているので、俺とお揃いだ。

「……（「ク「ク）」

無口な康太もいつの間にか明久の近くに寄っていた。

「おお！ ありがとう、ナル！ さて中身は何――――――僕のカロリーがああああっ！ ？ ジュースにすらカロリーがない！ ？」

弁当の中身はぎっしり詰められたこんにゃくだけが入っている。コーラはコーラでも、ダイエットコーラだ（笑）

「ほれ、折角明久のために作ってきたんだ。心して食えよ。」

「…………妬ましい。」

「つまむりじゃないか、明久。よかつたな食つもんがあつて。」

「うう……僕の貴重なカロリー源が……」

「アッハッハ、まあいいじゃん。姫路が弁当作つてくれるって言つてただろう?」

正直、弁当は明久いじりのために持つてきましたものだ。

「はい。弁当を持つてきましたので……その。」

「おお、楽しみじゃの!」

「は、はいっ。迷惑じゃなかつたひびきもつ」

と後ろに隠していたバッグを出してくる。  
姫路さんが約束通りに弁当を持ってきていた。

「迷惑なもんか!ね、雄二!」

「ああ、そうだな。ありがたい。」

「そうですか?良かつた~」

ほこやつと嬉しそうに笑つ姫路さん。不思議だ。『駆走してあげる側なのに喜ぶ何て。

ああ、そつえば明久のことが好きである疑いがあつたな。だから姫路は嬉しそうなのか?

「むー……つ。瑞希つて、意外と積極的なのね……」

明久を親の仇のように睨んでいる島田。  
お前はなんで怒っているんだ。

「それでは、せっかくの『馳走じやし、こんな教室ではなくて屋上に行くかの』。」

「そうだね。」

こんな腐った畠と男の臭いしかしない場所で頂くものではない。屋上の気持ちいい空間で弁当を味わうべきだろ？

「そうか。それならお前らは先に行つてくれ。」

「ん？ 雄一はどうか行くの？」

「飲み物でも買つてくれる。昨日頑張ってくれた礼も兼ねてな。」

「あ、それならウチも行く！ 一人じゃ持ち切れないでしょ？」

と珍しく気遣いをみせる島田。

「悪いな。それじゃ頼む。」

「おつけー」

「きつんと俺達の分をとつておけよ。」

「大丈夫だつてば。あまり遅いと分からぬけどね。後、僕の分は

「いこよ。もつ賣つたしね。」

「分かつた。そう遅くはならぬはずだ。じゃ、行ってくる。」

「雄一」と島田は財布を持って教室を出て行った。きっと一階の売店に行つたんだろう。

「僕らも行こうか。」

「そうですね。」

姫路さんが抱えていたバッグを明久が受け取り、屋上まで歩く。

「天氣が良くてなにようじや。」

「やうですねー。」

屋上へと続く扉の向こうは抜けるような青空。絶好のお弁当日和だ。

「あ、シートもあるんですよ。」

姫路がバッグからビニールシートを取り出す。準備万端だな。ピクニック用のセットだつたりするのだろうか。

わいわいと準備を始める。幸い屋上にはだれも居らず俺らの貸し切り状態である。

「気持ちいいねー。」

「清々しい気分だな。」

「…………（パク）」

ペーパー・シートに墨を投げ出す。日差しと風が気持ちよかつた。

「あの、あんまり自信はないんですけど……」

姫路さんが重箱の蓋を取る。

『おひつおひつ』

俺らは一斉に歎声をあげた。

凄く皿そうだ。唐揚げやエビフライにお握りやアスパラ巻きなど、定番メニューが中に詰まっている。

自信がないんですけど、って俺の方が自信なくすよ。

「それじゃ、雄一には悪いけど、先に――」

「…………（ヒヨイ）…………」

「あつ、ざるニギムッシュリー―」

動きの素早い康太がエビフライをつまみ取った。  
そして流れるように口に運び――

「…………（パク）」

バタン

ガタガタガタガタ

豪快に顔から倒れ、小刻みに震えだした。

「…………」

「…………」

「…………」

明久と秀吉と顔を見合わせる。

「わわつ、土屋君！？」

姫路が慌てて、配りうとしていた割り箸を取り落とす。

「…………（ムクリ）」

康太が起き上った。

「…………（グツ）」

そして、姫路に親指を立てる。多分『凄く美味しいぞ』と伝えたいんだろう。

康太……お前は男だよ！

「あ、お口に含いましたか？良かつたですか？」

ムツツリーの言いたいことが伝わったのか、姫路が喜ぶ。だがしかし、康太は生まれたての小鹿のように足を震わせている。

「良かつたらどんどん食べてくださいね。」

姫路が笑顔で勧めてくる。

そんなに嬉しそうに勧めると断りづらいだらう……！  
むしろ、どんなにまずからうとも残さず食べてやる、といつ気になつてくる。

だが、俺には田を虚うことさせて、今にも死んでしまいそうな康太が忘れられない。

（秀吉、ナル。あれ、どう思つ？）

姫路にきこえないくらい小さな声で明久が俺達に問う。

（…どう考えても演技には見えん。）

演劇部のエース、秀吉が言つんだ。決して冗談ではなく、素で康太は倒れ伏しているのだろう。

（康太が演技をする理由も見当たらぬしな……）

(だよね。ヤバイよね。)

(明久。ナル。お主ら、身体は頑丈か?)

(正直胃袋に自信はないよ。食事の回数が少なすぎて退化してると  
ら。)

(恐らく、一般人並みだと思つ。)

表情は当然笑顔のままだ。姫路にこの会話と俺らの驚愕を気取らせて落ち込ませるのは男がするべき所業じゃない。

(ならば、ここはワシに任せてもいいね!)

勇気ある秀吉の台詞が囁かれる。

(そんな、危ないよ!)

(そりだぞー何が入ってるか分からんのだぞ!-?)

(大丈夫じゃ。ワシは存外頑丈な胃袋をしていてな。ジャガイモの芽程度なら食つてもびくともせんのじゃ。)

見かけによらずタフな内臓だ。ジャガイモの芽つて確か結構な毒だったと思うが。

とかく胃袋というより免疫力じゃないのか?

(でも……)

(むふ……)

(安心せい。ワシの鉄の冒袋を信じて——)

外見は美少女でありながら、誰よりも男らしく台詞を言おうとした  
ところで、

「おう、待たせたな。へー、こつや皿やつじやないか。どれどれ?」

雄一登場。

「あつ、雄一」

明久が雄一を止める間もなく素手で卵焼きを口に放り込み、

パク バタン

ガシャガシャン、ガタガタガタガタ

ジューースの缶をぶちまけて倒れた。

「あ、坂本! ? ちょっと、びっくりしたのー?」

遅れてやつてきた島田が雄一にかけよる。

……間違いない。コイツは本物だ。

康太同様激しく震える雄一を見る。すると、雄一は倒れたまま明久の方をじっと見て、田でこう訴えていた。

『毒を盛つたな』と。

『毒じゃないよ、姫路さんの実力だよ』

そんな雄一に明久が田で返事をする。

「あ、足が……攣つてな……」

姫路を傷つけないようウソをつく雄一。やはり雄一は根が優しいな。明久にはド鬼畜だが。

「あはは、ダッシュで階段を昇り降りしたからじゃないかな。」

「つむ、そうじやな。」

「わうなの？坂本ってこれ以上なぐらに鍛えられてると思つねば。

」

「さつきまでテスト勉強をしていたから身体が固まっていたんじやないか？」

「なるほど、それならありえるわね。」

「じりいで島田さん。その手をついてるあたりに元気。」

「じりいで島田さん。その手をついてるあたりに元気。」

ビニールシートに腰を下ろしていいる島田の手を握るす明久。

「ん? 何?」

「さっきまで虫の死骸があつたよ。」

嘘をつく明久。これはファインプレーだ。

「ええっ! ? 早く言ひてよー。」

慌てて手を避ける島田。

「「1」めんど」「めんど」とにかく手を洗つてきた方がいいよ。」

「やうね。ちよつと行つてくれる。」

席を立つ島田。これでリスクが低減された。

「島田はなかなか食事にありつけずにあるの?」

「全くだね。」

「運が悪い。」

はつはつは、と男四人で朗らかに笑う。

一方その後ろ側で俺らは必死に作戦会議をしていた。

(明久、今度はお前がいけ! )

(む、無理だよ！僕だったらきっと死んじゃう。)

(流石のワシもさつきの姿を見ては決意が鈍る……)

( )

(雄一かしきなよ!姫路さんは雄一に食べてもらいたいはずだよ!)

(そこかの？姫路は明々に食べてもらいたそにしか)

(そんなことないよ！乙女心をわかれでないわ！)

卷之三

卷之三

アーチながれ

明久が指した明後田の方向を姫路が見る。

(一九四九年)

( も )ああー!?

その隙に明久が雄二の口の中一杯の弁当を押しこんだ。目を白黒させているので、顎を掴んで租借するのを手伝つてあげている。

「ふう、これでよし」

「……お主、存外鬼畜じやな。」

秀吉が明久に告げるが明久は無視した。  
そして雄一がさらに震えている。

「！」めん、見間違いだつたよ。」

「あ、そうだつたんですか。」

こんな古典的な手に引っ掛かるなんて、姫路の将来が心配になるほど純粹だなあ。

「お弁当美味しかつたよ。」  
「馳走をま。」

「つむ、大変いい腕じや」

雄一の大活躍によつてお弁当は無事始末完了。俺らの気持ちはこの青空より晴れやかだつた。

「あ、早いですね。もう食べちゃつたんですか？」

「うふ。特に雄一が『美味しい美味しい』ってす『』に勢いで。」

視界の隅にいる雄一がフルフルと力なく首を振る。

「そうですかー。嬉しいですっ。」

「いやいや、」  
「ありがとうございます。ね、雄一？」

倒れている雄一に水を向ける明久。

「う……う……。あ、ありがとうございます、姫路……」

ヤバい。目が虚ろだ。

「そういえば、おいしいと言えば駅前に新しい喫茶店が——」

話題をそらす明久。これ以上下手な事をいって『それじゃ、また作つてきますね』何て言われないようにする配慮。ナイスだ！

「ああ、あの店じゃな。確かに評判がいいな。」

「え？ そんなお店があるんですか？」

「うん。今度今日のお礼に雄一がおじいしてくれるってや。」

「てめ、勝手なこと言ひなつての。」

あ、雄一が復活した。康太は未だに復活してこない。明久の作戦はどうやら成功したようだ。

取りとめのない会話の続く、ほのぼのした時間が過ぎる。

「あ、そうでした。」

姫路がポン、と手を打つた。

「ん？ どうしたの？」

「実はですね——」

「じゃあ、とバッグを探る。

「デザートもあるんです。」

「ああつー姫路さんアレはなんだーー？」

「明久ー次は俺でもきつと死ぬ！」

雄一が命がけで作戦を止めにかかる。ツチつていうなよ明久。

（明久ー俺を殺す氣か！？）

（仕方がないんだよーこんな任務は雄一にしかできないーこれは任せたぜつ）

（馬鹿を貰つたーそんな少年漫画みたいな笑顔で言われてもできんものはできんー）

(「」の意氣地なし…）

(「」まで言ひながらお前にやらせでやる…）

(なつー！その構えは何！？僕をどうする気！？）

(拳をキサマの鳩尾に打ち込んだ後で存分に詰め込んでくれる…歯を食いしばれ！）

(いやあー！殺人鬼ー！）

俺は思った「」で食いつと言えば、きっと男らしいと思われる。

実際秀吉の時は男らしいと思えた。

なら俺は男と思われる為なら命は惜しくない！

しかし男と思われたとしても死んだら実感できないじゃないか。

クウウ…

ええい！俺は男だ！女子の手作り弁当を食わなければ男が廢れるぜ…！

俺の男らしさを皆に見せつけてやる…！

雄一が拳を握り、あわや肉弾戦とこうといひで、秀吉がすつと立ち上がり何かを告げようとするが、俺がその言葉を遮る。

(……ワシが（俺が行く…）ナル！？

（ナル！？無茶だよ、死んじやつよ…）

(俺の事は率先して犠牲にしたよな！？)

(女子の手作り弁当を食べないなんて男が廃る…そしてお前は俺の男らしさをしかと田に焼き付けとくんだね…)

「どうかしましたか?」

「あ、いやーなんでもない…」

「あ、もしかして…」

姫路が顔を曇らせる。

まさか嫌がつてるのがバレたか!?

「『』みんなさーっ。スプーンを教室に忘れちゃいましたっ」

言われてみれば容器に入っているデザートはヨーグルトと果物のミックス(のよつこ見えるもの)だ。箸で食べるのは難しいかもしない。

「取つてきますね。」

スカートを翻し、階下へと消える姫路。チャンスだ。

「よし、この間に頑張りよつ。」

戦場に向かう戦士のよつに緊張しながら容器を手に取る。

「……すまん。恩に着る。」

「『』すまん。ありがとわ。」

「ワシが不甲斐ないばかりに……すまないのじや。」

申し訳なさで俯きがちな明久達に俺はフツと笑いかけ、言つ。

「我が生涯に一片の悔いなし……」

容器を天に掲げながら口の中ごザートを丸ごと落とし呑みこむ。

「むぐむぐ。なんだ、意外と普通だと『まあっ……』

俺こアマが出来た。

雄  
一

なんだ?

……也、老王無理矢理食へさせで一メシ」

分が二で貰えたならいい。

自称『男らしい男』は白目で泡を吹いていた。

その後、これからの中戦などを話したり、Bクラスに宣戦布告もしたのだが、ナルが起きることはなく。一日が終わつた。

ちなみにナルが起きたのは午後7時で、保健室で寝ていたのだが真横に看病していた鉄人がいて、驚いてもう一回氣絶してしまい、結局帰れたのが午後九時であつた。

side 明久

「うあー……づかれたー」

机に突つ伏すボク。

ただでさえテストは疲れるのに、さらに朝から船越先生とひと悶着があつたから余計に疲れた。

ちなみに、船越先生には近所のお兄さん（三十九歳／独身・・・お兄さん？）を紹介てあげた。昨日の事もその件だという事にしたし。

「うむ。疲れたのう。」

「お疲れ。ほれ、弁当だ。『一ラモやるよ。』

いつの間にか近づいていたナルと秀吉が答えた。ナルは僕に弁当を作ってきてくれたようだ。

今日は秀吉は髪をポニー テールにしている。ナルとお揃いだ。ううつ。

僕のストライクゾーンど真ん中だ。一人揃つて男のくせに僕を惑わ

せるなんて！

「…………（ノクノク）」

いつも無口で存在が薄く思われがちなムツリーもいる。  
そして楽しみなナルの弁当をあけると――

「おお！ ありがとう、ナル！ さて中身は何―――――― 僕のカロリー<sup>ガ</sup>があああつー？ ジュースにすらカロリーがない！？」

「こんにゃぐだけががきつしり入つていて。貰つた飲み物もよく見て  
みるとダイエット「一ラだつたし。  
なんてことだ――！」

「ほれ、折角明久のために作つてきたんだ。心して食えよ。」

「…………妬ましい。」

「つまそつじないか、明久。よかつたな食つもんがあつて。」

「うう……僕の貴重なカロリー源が…………」

「あれ？ ノーラ呑みかけ……っは！？  
ナルの飲みかけのペットボトル…………ドキドキ。」

「アッハッハ、まあいいじゃん。姫路が弁当作つてくれるって言つて  
ただろうつへ。」

「そういえば姫路さんは皆に弁当を作つてくれるんだった。」

「はー。弁当を持つてきましたので……その。」

「おお、楽しみじゃの！」

「は、はこつ。迷惑じやなかつたひびひわつ」

と後ろに隠していたバッグを出してくる。

姫路さん！君は何でいい子なんだ！君のおかげで僕はもつらしほ  
生きできるかもしれないよ！

「迷惑なもんか！ね、雄二！」

「ああ、わうだな。ありがたい。」

「わうですか？良かつた～」

ほにゅうと嬉しそうに笑う姫路さん。不思議だ。『馳走してあげる  
側なのに喜ぶなんて。

やつぱり僕には優しい女の子の氣持ちつてよくわからない。

「むー……。瑞希つて、意外と積極的なのね……」

僕を親の仇のように睨んでいる島田。

厳しい女の子の気持つもよくわかんない。

「それでは、せつかべの！」馳走じやし、こんな教室ではなくて屋上  
に行くかのう。』

「わうだね。』

こんな腐つた畳と男の臭いしかしない場所で頂くものではない。屋上  
の気持ちいい空間で弁当を味わつべきだらう

ちなみにナルの弁当と呑みかけの「一郎はもつたいないのでドキドキしながらしつかり頂いた。

．．．．．

屋上に着き姫路さんの敷いたビニールシートに足を投げ出す僕。  
日差しと風が気持ちよかつた。

「あの、あんまり自信はないんですけど……」

姫路さんが重箱の蓋を取る。

『おおつー。』

僕らは一斉に歓声をあげた。

凄く盛りそうだ。唐揚げやエビフライにお握りやアスパラ巻きなど、定番メニューが中に詰まっている。

「それじゃ、雄二には悪いけど、先に——」

「…………（ヒヨイ）」

「あつ、ずるいぞムツリーリー！」

動きの素早いムツリーリーがエビフライをつまみ取った。  
そして流れるように口に運び——

「…………（パク）」

バタン

ガタガタガタガタ

豪快に顔から倒れ、小刻みに震えだした。

「…………」

「…………」

「…………」

ナルと秀吉と顔を見合わせる。  
二人とも可愛い——じゃなくて。

「わわっ、土屋君ー?」

姫路さんが慌てて、配うつとしていた割り箸を取り落とす。

「…………（ムクリ）」

ムツツリーが起き上った。

「…………（グッ）」

そして、姫路さんに親指を立てる。多分『凄く美味しいぞ』と云えたいんだろう。

「あ、お口に含いましたか？良かつたですっ」

ムツツリーーの言いたいことが伝わったのか、姫路さんが喜ぶ。だがしかし、康太は生まれたての小鹿のように足を震わせている。

「良かつたらどうどん食べてくださいね。」

姫路さんが笑顔で勧めてくる。

そんなに嬉しそうに勧めないと断れない。  
むしろ、どんなこまづからうとも残さず食べてやる、ヒコヒシと  
えなつてくる。

だが、僕には田を虚ることさせて、今にも死んでしまいそうな康太が  
忘れられない。

---

「デザートもあるんです。」

「ああっー。姫路さんアレはなんだーーー？」

「明久！次は俺でもきつと死ぬーーー！」

雄一が命がけで作戦を止めるにかかる。ツチ。

(明久！俺を殺す氣か！？)

(仕方がないんだよ！こんな任務は雄一にしかできない！ここの任  
せたぜつ)

(馬鹿を言つたな！そんな少年漫画みたいな笑顔で言われてもできん  
ものはどうぞ…)

(ここの意氣地なし！)

(やこまで言つながら前にやらせてやる…)

(なつー！その構えは何！？僕をどうする気ー！？)

(拳をキサマの鳩尾に打ち込んだ後で存分に詰め込んでくれる…歯  
を食いしばれ！)

(いやあー！殺人鬼――！)

雄一が拳を握り、あわや肉弾戦というところで、秀吉がすっと立ち  
上がり何かを告げようとするが、ナルがその言葉を遮る。

(……ワシが（俺が行く！）――ナル！？)

(ナル！？無茶だよ、死んじゃつよ…)

(俺の事は率先して犠牲にしたよな！？)

そりゃそうだ。見た目が美少女の方が雄一よりはるかに重要度は高いんだから。

しかし、自称鉄の胃袋の秀吉より、普通の人間のナルだと危ないんじゃ……

（女子の手作り弁当を食べないなんて男が廃る！そしてお前らは俺の男らしさをしかと皿に焼き付けとくんだね！）

男らしい事を口にするナル。見た目美少女だし声も少女の声であるナルが口にするとなんか微笑ましい。

「どうかしましたか？」

「あ、いやーなんでもないー！」

「あ、もしかして……」

姫路が顔を曇らせる。

まさか嫌がってるのがバレちゃった！？

「『めんなさいっ。スプーンを教室に忘れちゃいましたっ』

言われてみれば容器に入っているデザートはヨーグルトと果物のミックス（のよひに見えるもの）だ。箸で吃べるのは難しいかもしない。

「取ってきますね。」

スカートを翻し、階下へと消える姫路。チャンスだ。

「よし、この間に頑張りよう。」

戦場に向かう戦士のよう元器を手に取るナル。

「……すまん。恩に着る。」

「じめん。ありがと。」

「ワシが不甲斐ないばかりに……すまないのじや。」

申し訳なさで俯きがちな僕たちにその綺麗な顔をこちらに向けてナルはフツと笑いかけ、言つ。

「我が生涯に一片の悔いなし……」

ナルは容器を天に掲げながら口の中にザートを丸ごと落とし呑みこむ。

「むぐむぐ。なんだ、意外と普通だと」ぱあつー。

「……雄一。」

「……なんだ？」

「……わざは無理矢理食べさせて『メン』

「……分かつて貰えたならいい。」

自称『男らしい男』は白目で泡を吹いていた。

## 第八話（後書き）

今回の s.i.d.e 明久とかあんまりいらないかもっすね。  
総合ポイントが中々伸びない。

やはり文才がなく初心者である俺には、ほかのなろうの人気作品の  
ような物は書けないようだ。

感想……すぐ、ほしいです。

## 第九話（前書き）

そろそろオリ主がバカテス世界に入り込んだ影響が大きく出てきます。

（原作ブレイクというんだっけ？）

もしかしたら五時だ！辻一

が多いかもしません。しかし今はとても眠いので明日確認します  
！（今確認しろ　あ）

## 第九話

「さて皆、総合科目テスト御苦勞だった。」

教壇に立つた雄二が机に手を置いて皆の方を向いている。

俺が姫路のデザートによつて倒れた翌日、今日の午前中がテストで、ついさつき皆の全科目のテストが終わつて昼食をとつたところだ。総合科目勝負なんてやつたものだから、皆補給のテストが多くて大変そうだった。

「午後はBクラスとの試召戦争に入する予定だが、殺る気は充分か？」

『おおーっ！』

一向に下がらないモチベーション。俺らのクラスの唯一の武器と言つてもいいだろう。

ちなみにBクラスへの宣戦布告は昨日の事件の後に明久が身を張つてやり遂げたらしい。

「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない。」

『おおーっ！』

「そこで、前線部隊は切り札、姫路瑞希に指揮を取つてもらつ。野

郎共、きつちり死んで来い！」

「が、頑張ります。」

男のノリについていけないのか、若干引き気味な姫路が一步前に出る。

『うおおーっ！』

一緒に戦えるとあって、前線部隊の士氣は最高潮に達しうとじていた。

とりあえず今回は廊下での戦闘に勝ちに行くらしい。

ここで負けると話にならないから戦力もFクラス五十人中四十人をつき込む。そこにはFクラス最強かつ校内でも一位という学力を誇る姫路もいる。

廊下での戦闘はまず取れるだろう。

キーンコーンカーンコーン

昼休み終了のベルが鳴り響く。いよいよBクラス戦開始だ。

「よし、行つてこい！ 目指すはシステムデスクだ！」

『サー、イエッサー！』

敵を教室に押し込むのが目的なので、とにかく勢いが重要だ。俺らはほぼ全力でBクラスへと向かう廊下を駆けだした。

「あ、ナル。お前はここに残れ。」

俺だけ雄一に呼び止められた。  
なんだ？」

「万が一の話だが今回の作戦が失敗した時の保険に残つていってくれ。

」

「もし失敗したとき俺はどうすればいいんだ？」

「ああ……その、なんだ。とりあえず失敗したらの話なんだからその時話そつ。」

雄一が口を濁らせてこう。

そんなに俺に言いつらう内容なのか？

「…………俺も保険。作戦内容は知ってるけど話せない。」

「なんで話せないんだ……？まあいい。今話さなくてても問題はないんだろひつへ。」

すぐ話さないといつ事は下準備が必要な作戦でもないんだろう。またはすでに出来ているとか。

「…………（ヒクヒク）」

今回は学校にいくつか仕掛けた康太の隠しカメラで様子を見れるよ

うだ。なんと音声も聞こえるらしい。

「しかし、康太。何処でこんな高性能な機械を仕入れているんだ？  
盗聴器といいカメラといい。」

「…………My money.（秀吉やナルの写真を使って儲けてる  
なんて死んでも言えない。）」

「うう～！そんなことは分かる！たまには教えてくれたっていいだ  
るうー？」

少しくらい教えてくれたっていいじゃないか！？

「…………嘘は言つていない（ブンブン）」

…………諦めよ、う。

康太にいくら聞いても教えてくれないので、仕方なく隠しカメラの  
映像で試召戦争の様子を見る。

Bクラスは比較的文系が多いので、こちらの主武器は必然的に理系  
になる。

数学の長谷川先生は召喚可能範囲が広いので、一気に勝負をかける  
時にはありがたい先生だ。

他にも英語のライティングの山田先生と物理の木村先生もいる。  
あと一人……誰だっけ？名前忘れた……とりあえず歴史の先生！

立会いの教師を多くして我が軍が一気に駆け抜けていた。

『いたぞ、Bクラスだ！』

『高橋先生を連れているぞ！』

Fクラスの正面にはゆっくりとした足取りでBクラスのメンバーが歩いてくる姿があった。

人数は十数人程度。相手は様子見といったところだろうか？

『生かして帰すなーっ！』

物騒なセリフが皮切りとなり、Bクラス戦が始まった。

『Bクラス 野中長尾 総合 1943点』

VS

『Fクラス 近藤吉宗 764点』

分かつてはいたがBクラスとFクラスの差はかなり大きいようだ。やはり俺が行つた方が良かつたのではないかと思つてしまつ。

『Bクラス 金田一裕子 数学 159点』

VS

『Fクラス 武藤啓太 69点』

『Bクラス 里井真由子 物理 152点』

VS

『Fクラス 君島博 77点』

圧倒的な実力差に第一陣がことごとくやらかしていくのが見える。とどめを刺される前にフォローしてもらわないと戦力が激減してしまう。

『お、遅れ、まし、た……。ごめ、んな、さい……』

息を切らした姫路が遅れてやってきた。きっと明久達の全力疾走についていけなかつたんだろう。

『なつ！？なぜFクラスに姫路瑞希がいるんだ！Aクラスじゃないのか！？』

Bクラスの誰かが叫ぶ。雄一が切り札として隠していたおかげで姫路がいるということを知られていなかつたようだ。

声を聞き、Bクラス生徒の雰囲気が変わつた。明らかに姫路を警戒している。

『は、はい。行って、きます。』

そのままトタトタと戦場に紛れこむ姫路。

『長谷川先生、Bクラス岩下律子です。Fクラス姫路瑞希さんに数学勝負を申し込みます!』

『あ、長谷川先生。姫路瑞希です。よろしくお願ひします。』

早速勝負を挑まれる姫路。向こうとしては早く潰しておきたい相手なのだろう。

Fクラスの数少ない実力者だからな。

『律子、私も手伝つ!』

その後ろから、さらにもう一人Bクラス女子が召喚した。Bクラスは十人くらいしか来ていないので一人がかりなんて、よほど警戒しているようだ。

『サモン!』

喚声に応えて魔方陣が展開。おなじみの試験召喚獣が顔を出す。

敵の一體は剣と槍を構え、姫路の方は姫路の召喚獣の一倍はある大剣を軽々持っている。

そんな三人そつくりな召喚獣。ただし、

『あれ?姫路さんの召喚獣ってアクセサリーなんてしているんだね?』

は?明久。腕輪の事も知らないのか……?

?』

『あ、はい。数学は結構解けたので……』

たしか腕輪は、テストの点が400点以上の生徒の召喚獣には腕輪が与えられ、様々な特殊能力が使用可能になる。ただし能力行使には点数消費を激しくするリスクも伴うと聞いている。

デフォルメされた姫路 召喚獣は、大剣の他に左手首に綺麗な腕輪をしていた。

『そ、それって！？』

『私達で勝てるわけないじゃない！』

『向こうの一人がそれを見て顔色を変える。』

『じゃ、いきますね。』

姫路が小さな手をキュッと握りこむ。その動きに合わせて姫路の召喚獣が左腕を敵の方に向けた。

『ちょっと待つてよ！？』

『律子！とにかく避けないと！』

大げさなくらい横に飛び敵一人の召喚獣。その直後、姫路の召喚獣の腕輪が光を発した。

キュボツ！

『きやあああーっ！』

『り、律子！』

左腕から光線がほどばしったかと思つた瞬間、逃げ遅れた敵の召喚獸の一体が炎に包まる。

『Fクラス 姫路瑞希 数学 412点』

VS

『Bクラス 岩下律子&菊入真由美 189点&151点』

『う、ごめんなさい。これも勝負ですので。』

大きく避けてバランスを崩した的に肉薄し、大剣を振りおろし、相手の武器ごと一刀両断し、一瞬で決着はついた。  
というか姫路。何故腕輪つかつた。いまの相手なら使うまでもなかつたろうに。

『い、岩下と菊入が戦死したぞ！』

『なつ！そんな馬鹿な！？』

『姫路瑞希、噂以上に危険な相手だ！』

Bクラスの残り八人に驚愕の表情が浮かぶ。  
といふか相手の表情まで見えるこの隠しカメラ、店の監視カメラでもこんなに高画質のを見たことないのだが。  
しかし、さすが姫路。学年の成績で常に一桁にいるだけの事はある。

『み、皆さん、頑張つてください！』

姫路の指揮官らしきない指示。しかし、Fクラスにとつて美少女の声援はなによりの力になる。効果絶大だ。

『やつたるでえーつ！』

『姫路さんサイコーシー！』

信者急増中。

『姫路さん、とりあえず下がって。』

『あ、はい。』

敵の士気も挫いたので、姫路に一旦下がるよつに言つ明久。姫路は特殊能力を使つてしまつたので。点数が減つてしまつてゐる。それにそう簡単に姫路にやられてもううと困るからな。

それに今なら姫路抜きでも、相手の前線部隊崩壊は時間の問題だろう。

『中堅部隊と入れ替わりながら後退！戦死だけはするな！』

そんな相手の指示が聞こえてくる。とりあえず狙いは成功。相手を徐々に下がらせて行つて、目的のBクラスに釘付けにするくらいで今日の戦闘は終了するだろつ。

こんなに俺がいなくとも計算通りいくのは姫路のおかげだろつ。

『明久、ワシらは教室に戻るぞ。』

『ん？ なんで？』

戦況を眺めていた明久のところに秀吉がやってきた。  
戻る？俺らのいるFクラスに何も問題は起きてないが。

『Bクラスの代表じゃが……』

『うん』

『あの根本らしい。』

根本？ああ、あの合コンの時にいた人か。  
あいつBクラスの代表になつたんだな。もしかしたら俺の上司にな  
つていたかも知れないな。

『根本って、目的の為には手段を選ばなくて、噂では球技大会で相  
手のチームに一服盛つたり、喧嘩には刃物はデフォルトだつたり、  
カニニングの常連だつたりする。あの根本恭一？』

『うむ。』

ん？根本ってそんなに酷い奴だつたのか？合コンの時の事件では  
むしろ人を身を張つて助けるいい男という印象を受けたが。

『なるほど。戻つておいた方が良さそつだね。』

『雄一達に何があるとは思えんが、念の為にの。』

明久が姫路に一言報告してから、明久と秀吉が数人を連れて俺達の  
いる教室へ引き返した。

「ほつ、良かった。何もなかつたようだね。」

「やうじゅの。」

明久と秀吉が教室に戻つて早々言つ。

「ああ、何もなかつたぞ。ついでに俺らはお前らの様子を隠しカメラで見て聞いていたが、根本にはそんな卑怯な噂があるのか？俺が前にあつた時はむしろその逆の印象を受けたんだけど。」

俺が明久に疑問をぶつける。

「うーん……僕も噂だけだから本当かどうかまでは知らないけど結構有名な話だよ。」

「ふーん……そなのが。まあいまのところ俺らにはそんな卑怯なことをしてないから注意するだけでいいだろ。」

「明久。今日午後四時までに決着がつかなかつたら戦況をそのままにして続きは明日午前九時に持ち越し。その間はBクラスとFクラスの試験戦争の勝敗に関する。一切の行為を禁止する。という協定を忘れるなよ？」

「分かつてるよ。その協定の調印と宣戦布告は僕が身体を張つてやつたんだからね？でも、体力勝負に持ち込んだ方がウチとしては有

利なんじやないの?」

「姫路以外は、な。」

雄二が明久に注意を促したが、さすがの明久も覚えているようだ。たしかに姫路の体力で最後まで戦争をやり続けるのは難しいだろう。

「あいつ等を教室に押し込んだら今田の戦闘は終了になるだろ。そつすると、作戦の本番は明日とこいつことになる。」

「そうだね。この調子だと本丸は落とせそうにないね。」

「その時は全体の戦闘力よりも姫路個人の戦闘力の方が重要になる。」

「局所的な戦闘になるってことだろ? それともDクラス戦の俺のようには姫路がどめを刺すとか。」

「だから受けたの? 姫路さんが万全の態勢で勝負できるよ!」

「そういうことだ。この協定は俺達にとってかなり都合が良い。」

それにも良くなBクラスがこの協定を承諾したな。といつても相手はFクラスだから問題ないと思つてのことなんだろうが。後姫路の存在を知らなかつたとか。

「明久。とりあえず前線にもどるぞい。教室では何もなくとも向こうでは何かされているかもしけん。」

そう言つと秀吉は教室を駆け足で出て行つた。

「ん。雄二、いつでくるよ。」

「おう。頑張つてこいよ。だからといって戦死なんかするんじゃないぞ。」

そう言つて明久も駆け足で教室から出る。

「しかし、思つていたよりうまくいっているな。後が怖くなるくらいに。」

そしてまた、前線の様子を監視カメラで確認すると、

『運よく補給テストの範囲が中国の歴史が主だつたぜー。』

『Fクラス 須川亮 歴史 302点』

VS

『Bクラス 鈴木一郎&田中明 142点&182点』

『なんだとお！？Fクラスに姫路や秋本以外にもこんな実力者がいたのか！？』

『ハツハアーフ！中華料理を調べるにあたつて、中国の歴史すべて

を調べきつたこの俺に死角はない!』

そんなことを叫びながらBクラスの召喚獣一體を棍で何回も滅多打ちにし、ボコボコにして倒した。

なんかのび太を殴るジャイアンみたいな感じだ。

というか須川ってやればできる子だつたんだな。

その中華料理の熱意をすこしは勉強に回せ。絶対にAクラスいけるぞ。

ん?

なんか廊下の曲がり角で小山が頭だけだしているのが見える。なんか須川の事を見ているように見えるが……。まあいいか。

そして姫路も前線で大分活躍しているが、そろそろ疲れが溜まっているし点数の消費も激しいだろ?。

そしてそんな時にアイツはやってきた……

side Bクラス代表、根本

所詮Fクラスだと思い、午後四時に決着がつかないなら翌日の午前九時までの休戦を承諾してしまった。  
まさか姫路がいるとは思わなかつた。

そして下調べで秋本奈留がFクラスにいることを知り少し驚いたが、  
何故か秋本はまだ表に出でこない。  
何か作戦でもあるのだろうか……？  
その下調べついでに秋本の好みと性格も調べたのだが。

1・男らしい人が好き。  
(自分が男らしくなりたいのと  
間違われている。)

2・卑怯なことは好まない。

このくらいしか分からなかつたがこれは少しまずい。

1の男らしさはまあいい。

しかし2の卑怯な事は好みない。これはまずい。俺はこの高校に入つてから、まだ悪行がバレテはないもののその噂がかなりたつてしまつている。唯一の救いなのは噂程度で済んでいることだ。今から改心しても遅くはないのだ。

俺は秋本に好きになつてもう為、今までの自分から『生まれ変わつた俺を見てくれ!』作戦を決行することにした。

まずはこのFクラス戦で男らしく正々堂々戦う男だということを手始めに我がBクラスから教えてやらねばならない。

そして今——我がBクラス前線は姫路、そしてまさかの須川のせいで教室の近くにまで押し込まれてしまつている。

しかし、敵の主戦力の姫路は度重なるBクラスメンバーとの戦いに  
より疲弊しているはず。

だからといって他のBクラスの奴らではまだ勝てない。

しかし、限りなくAクラスに近い成績を持つこの俺。Bクラス代表、  
根本恭一ならいまの姫路を倒し、

戦争の流れをBクラスに変える事ができるだろう――

いつもの俺なら姫路のなんらかの弱みを握って戦闘不能にするところだが、俺は改心したのだ。  
そんな卑怯なことはしない。

「お前らー！俺がFクラスの切り札、姫路瑞希を仕留めに行くー！俺の  
邪魔をされないようにー！」  
「…」

「し、しかし、代表が今出て行つてやられたらどうするんですか！？」

「フン！今疲れている姫路を倒さないとタイムリミットで休戦で、  
戦争の開始は明日になり、姫路の体力が回復してしまうー！そくなつたら姫路を倒すのはひと苦労だぞ！」

もしかしたらそのまま姫路によつて教室に押し込まれて負けてしまう。だからBクラスで最大の点数を保有している俺ならば、今の疲弊している姫路を倒せるーそしたら俺達の勝ちをほぼ確定だ！」

「はつ、はい！（あの代表が正々堂々と姫路と戦うのか！？）」

そうして俺達は教室を出、廊下を全速力で走りぬける。

．．．．．

俺の標的、姫路瑞希はちょうど我がクラスメンバーを倒して下がるうとしてこるようだ。

「な！？敵の代表が援軍を連れて前線に出てきたぞ！？」

「なにが狙——まさか姫路さんか！？」

相手が俺らの目的に気づいたようだ。

フン、今更気付いたつて遅いんだぜ——

「逃がすか！Bクラス代表根本恭一がFクラー

「させるか！Fクラス須川亮が……つて糞！近衛部隊か！？」

「Bクラス工藤信一がFクラス須川亮に歴史勝負を申し込みます！」

「サモン！」

『Bクラス 工藤信一 歴史 159点』

VS

『Fクラス 須川亮 150点』

「良くやった、工藤！Bクラス代表根本恭一がFクラス姫路瑞希に歴史勝負を挑む！」

「え、あ！」

「サモン！」

無事、姫路に勝負を挑む事が出来た——しかし勝負はこれからだ

……

俺の召喚獣は、数珠で繋がれた一対の大鎌に陣羽織を羽織った武将

風の出で立ちだ。

『Fクラス 姫路瑞希 歴史 258点』

VS

『Bクラス 根本恭一 220点』

クツ！得意科目の歴史でもまだ点数で勝てないか！  
だがたつた38点の差だ！体力的にも点数的にも目に見えて疲弊している今の姫路なら勝てる！

「おらああ！」

「あ、きやあ！？」

俺の召喚獣が姫路の召喚獣に向けて鎌を横に振るが、間一髪でそのでかい大剣で止められてしまうが、もう片方の鎌が空いている。その空いている鎌も振るうが相手が力任せに大剣を振ってきたせいで、俺の召喚獣自体が吹っ飛ばされてしまう。

しかし、姫路の召喚獣は大剣を思いっきり振ったせいでバランスを崩している。

——チャンスだ！！

「ウチの姉妹達が何事か…」

俺の召喚獣は大げさなぐらい地面を思いつきり蹴つ飛ばして姫路の召喚獣に突っ込み、

ザシユツ!

二つの鎌で切り伏した。

「Fクラス、姫路瑞希をこの根本恭一が討ち取つたり……！」

『おおっ！Fクラスの最大戦力を代表が倒したぞ！』

『噂で卑怯な奴だと思っていたが、そんなことはなかつたんだな！』

『見直したぜ！』

『な……何て奴だ……代表自ら敵を向かい打つなんて……』

『俺らの姫路さんが補習室行きだなんて！』

「俺は目的を達成したから戻るぞ！お前らはこのまま敵の前線部隊を抑え込むんだ！」

そして俺の作戦通り姫路を倒し、手始めにBクラスから俺の認識を変えさせた。Fクラスにも俺の印象が変わったようだな。

うまくいけばこのことが秋本にも伝わるかも……！

とにかくこれでこの戦争は十中八九俺達の勝ちだ。

そんな事を考えながら俺は周りに三人の護衛を連れて教室へ戻った。

キーンゴーンカーンゴーン

四時のチャイムがなり、協定通り試召戦争は一時休戦となつた。

side end 根本

side 小山

『ハツハアーフー！中華料理を調べるにあたつて、中国の歴史すべてを調べきつたこの俺に死角はない！』

須川君かっこいい・・・！

それに合コンが終わつた後、Fクラスに入つてたから頭はやはり悪いかと思つていたけど。  
そんなことはなかつた。

ただ須川君は勉強していなだけみたい。  
だって頭が悪いならいくら好きな事でもテストで300点越えなんてできないわよね？

せうじい……なんだあのとんでもない断つたんだが……

それにメルアルも合戻の時、教えてもらひのもわすれちやつた……

ああ、 いれからじいこよーへー！？

私はどうあればここのよー！？

End side 小三

## 第九話（後書き）

Bクラス戦争は思っていたより長かったので一回に分けて投稿します。

## 第十話（前書き）

疲れた。間違えて一回全部文消してしまった。

一からまた書いた。

もとに戻すとか使えなかつた。

しねる。

とても悲しかつたです。

明日奈の女装姿、学校で書いてしようかな。（期待しないでね。）

あと11/30から12/5まで期末テストなので試験勉強のために更新遅くなります。

申し訳ないです。

11/18修正

『ふわ！？え、あ、ごめんなさああい——』

西村先生によつて補習室に連れ去られていく姫路。まさか俺らが倒すべき根本が正面からやつてくるとはな……

姫路が疲弊して下がるところを狙われた。

姫路がいなくとも敵を教室に押し込むことは出来るだ奴いつ。しかし、その後が問題だ。

敵を教室に押し込むということは敵がそれだけ同じところに密集してしまい、守りが硬くなってしまうのだ。

その守りを抜くために姫路の火力が必要だったのだが……。その肝心の姫路は戦死してしまった。

姫路と須川の活躍で敵を15人も倒すことが出来たが、Fクラスの被害も甚大で姫路を含め20人もやられている。

残りBクラス35人 vs Fクラス30人といったところだ。かなり厳しい。

「想定していなかつたわけではないが、まさかここで姫路がやられるとはな……」

「どうするんだ？これじゃ短時間なら教室に押し込むことが出来て

も、そこから突破する」ことはできないぞ?」

「……すまん。ナル。保険といった作戦のことなんだがな——」

雄一が言つてゐた作戦の内容を説明される。  
ほつまう、なるほどなるほど—— つてなにい!?

「なんで俺がそんなことをしなくちゃいけない!? とにかく他の奴でもいいだろ!」  
「」

「他の奴だと点数が足りなくて確実じゃないんだ。頼む!」

「う、う、う、なあーつー分かったよーやればいいんだろ!」  
「や  
ばー!」

「ああ、すまない。」

「……例の物は準備してある。」

なんでおれがそんな事をやらなければいけないんだ……

雄一の作戦を聞きゲッソリとしていた時、四時を告げるチャイムが鳴った。

Bクラス戦は一旦休戦だ。

そして明久達が教室に戻ってきた。姫路も補習室に行つていたが、すぐに休戦になり皆が帰ることになつたから勉強する間もなく戻つてきた。

「えつと、その、『めんなさい』……」

「いや、謝る」とはないよ。僕らもまさか代表自ら突っ込むとは思わなくて、止めることができなかつたんだから。」

「もうじゅの。すまない姫路。こうこう事がなによつてするのもワシの仕事じゃつたからの……」

謝る姫路に慰める明久と秀吉。

「皆戻つたか?……もし全員いるな。皆一作戦を急遽変える」とした。明日はとにかく時間を稼げ!教室に押し込まなくともいい!」

雄一がFクラス全員が戻つたのを確認すると作戦の概要を伝える。

「しかし姫路さんがいなくても勝てるのか?」

Fクラスの誰かから疑問の声が上がる。

「ああ、もし作戦が失敗した時の事はちゃんと想えてある。作戦の漏洩がないように詳しいことは話さないが俺を信じてくれ…必ずこのBクラス戦には勝てる!」

雄一がFクラスメンバーの疑問に答える。

はあ……明日の事を考へると憂鬱だ。

「とにかく明日は時間を稼げるのなら戦死しても構わんし、敵を倒すことができなくともいい。時間を稼ぐことを念頭に行動しひ――それでは今日は解散する。皆御苦労だった。」

雄一が皆にもう一度念を押してから解散を宣言する。

「…………ナル。明日、八時半には体育館裏だかひ。」

「分かつてゐよ…………ハア……」

side 明久

Bクラス戦二日目になり、もうすぐ午前九時だ。

僕達は今、Bクラス前の位置に待機している。

雄一には時間をとにかく戦死しても稼げと言われたが、

相手はBクラスで実力差が大きすぎる。その上現在はBクラスのが  
人数も多いしこちらは姫路さんがいない上、何気に頼りになつた須  
川もさすがに点数が消耗して、ただのFクラスメンバーと変わらな  
くなつてしまつている。

ナルも雄一の作戦とやらで今はいない。どのくらい時間が稼げるか  
分かつたものじゃない。

「いい? 皆、できるだけ多対一の状況を作りながら倒さなくともい

いから敵を翻弄せんんだ！」

『おひーー。』

今回、部隊長でもない僕の「こと」を素直に聞く旨。  
姫路さんがいなくとも勝てる」と信じているようだ。  
雄一のカリスマっぷりはやはり凄い。

キーンゴーンカーンゴーン

九時のチャイムが鳴り響く。戦争の再開だ！

「いけえ！姫路さんのいなーFクラスなんぞ所詮、俺たちの敵じゃ  
ない！」

『おおひーー。』

敵の部隊長が開始早々突撃と命令している。  
そしてすぐに我が軍と激突する。

「ドアと壁をうまく使うんじゃー戦線を拡大させるでないぞ！  
勝負は極力単教科で挑むのじゃー補給も念入りに行え！」

総司令官である姫路さんがいないので今は副司令官である秀吉が指揮をとっている。

「左出入り口、押し戻されています！」

「古典の戦力が足りない！援軍を頼む！」

押し戻された左にいるのは古典の竹中先生だったか。まずいな。Bクラスは文系が多いので、強力な個人戦力で流れを変えないと一気に突破される恐れがある。

くつー姫路さんがいれば……いや、いない人のことを考えても仕方がない。

「左出入り口は押し戻されても構わない！だから無駄な戦死だけはするでないぞ！」

しかし突破されるのもやはりまずい、仕方ない。あの手を使うしかない！

「だああつー！」

掛け声と共に人ごみを搔き分け、左側の出入り口にダッシュ。そして立会人をやっている竹中先生の耳元でささやく。

「……ジラ、ずれてますよ。」

卷之二

頭を押さえて周囲を見渡す竹中先生。

いたといへばの為の脅迫行為、古典教説編の「をこゝなど」にて便り  
羽目になるなんて。これは計算外だ。

「少々席を外します！」

狙し通じ少しの間出来る

「古典の点数が残っている人は左出入り口へ！消耗した人は補給に回つて！」

応急処置だけど、これで少しほ持ち直すはずだ。

「右側出入り口、教科が現国に変更されました！」

「数学教師はどうした！」

「Bケレス内に拉致された模様！」

右側までもBクラスの得意とする文系科目に切り替えられるなんて。  
結構ピンチだ！

そして僕たち前線部隊は着々とBクラスに戦力を削られていく。現在、戦争を始めてから1時間半といったところだ。

もう、そう長い時間を稼げられそうにない！ いつになつたら雄一のいう作戦が始まるんだ！？

「お前らしい加減諦めろよな。昨日から教室の出入口に人が集まりやがって。暑苦しいことこの上ないっての。」

いつまで時間を稼げばいいのかと焦っていると、Bクラスの教室のドア近くから、根本君の声が聞こえてきた。

「どうした？ 軟弱なBクラス代表サマはそろそろギブアップか？」

後ろから聞きなれた雄一の声も聞こえてきた。  
僕たちは劣勢になつてきているので時間を稼ぐのに、雄一率いる本隊まで出動せざるを得なくなつたのだろう。

そして何故か保険体育の教師、鉄人がBクラスの教室に入つていく。

「はア？ ギブアップするのはそつちだろ？」

「無用な心配だな。」

「せうか？頼みの綱の姫路さんもいないんだぜ？」

相手は姫路さんがいないので決して負けるとは思っていないようだ。

「……お前ら相手にはこなべても問題はないからな。これからたために勉強させてるのや。」

「けつ！口だけは達者だな。負け組代表をとよお。」

「負け組？それがFクラスのことなら、もつすぐお前が負け組代表だな。」

「雄一がやけに強気だ。もつ作戦は実行されているのか？」

「…………態勢を立て直す！一回下がるぞ！」

雄一がものすごい二ヤケでいる。

「どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか！？」  
「じりつ  
た工藤。俺になんか用か？」

すこしイライラした様子の根本にBクラスの工藤君が背中を叩く。  
——あれ？僕の知っている工藤君とはすこし雰囲気が違つような

「…………」Fクラス、土屋康太

「？」

おやかムシ シローーー!?

根本や周りも気づき、根本は慌てて逃げようとして、周りは間に入ろうとするが、間に合わない。

「ナニヤアキラ、ナニヤアキラ」

ムツツリーーーが桂を取りながら言つ。

「……Bクラス根本恭一に保健体育勝負を申し込む。」

「マッシュルーム……！」

「——サモン」

『Fクラス 土屋康太 保健体育 441点』

VS

『Bクラス 根本恭一 203点』

ムツツリーニの召喚獣は手にした小太刀を一閃し、一撃で敵を切り捨てる。

今ここに、Bクラス戦は終結した。

久明徳人

## 時間を少し遡る

Sideナル

今は九時少し前でBクラスの真下。つまり一階の空いている実習室にいる。

そして今、俺は

二二

女装をしている。

ちくせうー！俺だって好きで女装をしている訳じゃないーー！  
めちゃくちゃ恥ずかしいんだぞー！

では何故女装なんぞをしているのかと言つと。

Bクラスの工藤（愛子じやないよ？）という男を暗殺（殺さないけどさ）して康太と入れ替えるという作戦を決行しているのだ。

しかし、さすがにルール違反で直接手をだして工藤を拉致るのはよろしくないので代わりに補習室に行つてもらう方法をとる。

作戦内容は、

・康太が工藤になんらかの方法で偽の告白の手紙を渡す。

〈内容は午前九時半に1階の空いている実習室で待っている。つて  
感じ〉

・俺が八時～九時の間に女装する。（別に約束の時間までに女装すれば問題ない。）

・そして、工藤が来たら数学勝負を挑み、倒して西村先生に補習室に連れて行つてもらう。

・入れ替わる。

大体こんな概要だ。

前にもいつたように数学の長谷川先生は召喚可能範囲が広いのでBクラスで召喚フィールドを形成していても、一階下のこの実習室にまで届くのだ。

それを利用するのである。

ちなみに一階下にまで召喚フィールドを形成できるのは長谷川先生以外に不可能だ。

このことを何故知ってるのかといふと、康太の謎の情報網に引っ掛かっていたそうだ。

あと入れ替わる相手を工藤に選んだ理由は、

髪の毛が長く前髪が鼻くらいまで伸びているから顔が半分くらい隠れてるし、体格、背の高さも康太とほとんど一緒なので、他の人物と比べて比較的入れ替わりやすいのだ。

そもそも、入れ替える理由は、Bクラスを突破するのは今のFクラ

スの現状では不可能なのだ。

しかし、潜入という形を取れば真正面からBクラスの前線を突破するよりは、根本の首を討ち取ることできる可能性が高い。

だからこの作戦を実行することになったのだ。

じゃあなんでわざわざ俺が女装して呼び出すの？

普通に他の方法とかで呼び出せばいいじゃん。それに工藤を呼び出すのは他人がやっても問題ないじゃん。

そう思つだらう。

しかし、工藤にことひでじでもいこよつな内容で呼び出すのは当然不可能だ。

だってちよつといふ試合戦争の真っ最中に呼び出されるのだ。

すこしへらに重要な内容でも大事な戦争中に抜け出せるわけがない。

しかし、告白といった話なら別だ。

もし、告白の内容が本当だとしたら、せつかくの嬉しいイベントをみすみす投げ出してしまつとの同義だ。

俺なら絶対行く。

今までに告白されたことはあるがすべて男子だった。粉バナナ！！

とにかく俺だつて彼女がほしいのだ。

若干恋愛に疎いと自分でも思つてゐる俺がそうなのだ。

他の一般男子高校生はさうに彼女が欲しいと思つてゐるだらう。  
リア充爆発しろつて言葉があるくらいだしな。（違

俺もよくやう思ひ。

あと俺がこの作戦をやらなきゃいけないのは工藤を倒すには他の工  
クラスメンバーーじゃ難しいからだな。

俺の他にやれそつなやつは姫路くらいいだ。

そして計画通り、九時半になり工藤が来た。

「う、別に本当に面白するわけじゃないがそれでも恥ずかしいし、  
女装姿を見られるといつのもさらにも恥ずかしい。

「え、えっと。君が僕をここに呼んだのかな？」

工藤がすこし驚愕そうな表情を浮かべてから顔を赤くし俺に質問を  
する。

今の俺は髪を下ろし前髪で顔の左半分を隠しているので、俺が秋本  
奈留だと気づかれていないようだ。

「は、はーーえっとその…………」めんなれー

「へっ？」

「工藤さん、秋本奈留が工藤信一に数学勝負を申し込みますー。」

俺は恥ずかしさで顔を今まで一番かと思つほど赤くし、一刻も早く終わらせたかったので早速倒すことにする。

「サモン！」

『Fクラス 秋本奈留 数学 257点』

VS

『Bクラス 工藤信一 121点』

そして相手が驚いて固まっている間にハルバードを使い一瞬で切り伏せる。

そしていまだに呆然としている工藤をどこからともなく現れた西村先生が連れてゆく。

…………すまない少年よ。今度機会があつたならこの埋め合わせをするよ。

「…………さすが奈留。（着替え写真から赤い顔まですべて写真で撮つた！）」

隠れていた康太が出てきた。

「俺にここまでさせたんだ。絶対根本を倒せよ。」

「…………（ハクハク）」

そして康太は工藤の髪型にそっくりなヅラを被り、Fクラス用のネクタイをBクラス用と交換してから、この部屋から出て行った。

あつ、俺も保健体育の教師を探してBクラスに入れてやらないと。

．．．．．

ちなみにどうやってBクラスの中に康太が紛れ込んだかというと普通に戦闘中で荒れている廊下を走りぬけて普通に教室に入ったらし

い。戻る際の建前は状況報告として教室に戻ってきた。との事。

あと、潜りこんですぐ根本を倒さなかつたのは、保健体育の先生がいなかつたから倒せなかつただけである。

## 第十話（後書き）

つかれた。ストーリーで もし 矛盾点があつたら報告くれるとあります。

もしかしたらオリ設定の書き忘れだつたり、単純なミスだつたりがあるかもですので。

ちなみにいくつかオリ設定があります。

長谷川教師のフィールドは一階から一階にまで届くとかです。

あと結局今回もナルあんまり活躍なし、つまらないそは……！

## 第十一話（前書き）

かなり遅れています。

テストが終わってから

今二コ二 動画ではやりのふしぎなくすりシリーズを書いてました；

<http://www.nicovideo.jp/watch/sm12981879>

小説書かずに何やつてるんだって話ですよね。すいません；；

今回の話はすこし短いかもです。

## 第十一話

「さて、それじゃ嬉恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表？」

「……」

床に座り込んでいる根本君。さつきまでの強気が嘘のようになると嬉しい。

「本来なら設備を明け渡してもらひ、お前らに素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

そんな雄一の発言に、ざわざわと周囲の皆が騒ぎ始める。

「落ち着け、皆。前にも言ったが、俺達の目標はAクラスだ。ここが「ゴールじゃない」

「うむ。確かに」

「（）はあくまで通過点だ。だから、Bクラスが条件を呑めば解放してやるつかと思つ」

その言葉でうちのクラスの皆はどこか納得した表情になった。Dクラス戦でも言った事だし、雄一の性格を理解し始めているのだろう。

「おーい、戦争はおわったかー？」

僕らがBクラスと交渉している間にBクラスのドアが開く音があり、ナルのものだと思われる声がした。

「ナル？ 戦争は勝つたよ。今までどこにいた？……」

僕が後ろに振り向きながらその間に答えるのと一緒に今までどこにいたのかという疑問もぶつけようとしたのだが……

「うん？ 皆揃って固まつてござったんだ？」

そこにいたのはナルじゃなく、前髪がちょっと目にかかるくらいで腰に届きそうな真っすぐ下ろした髪、文月学園の女子制服を着た女の子がいた。

「えっと……失礼だけど君どうかであつた事あつたかな？」

その女の子は自分が思つに……その、かなりかわいい。顔の全体像も見えないのにもかかわらずだ。

ちょっと胸がないけど逆にそれがバランスが取れているように見える。

どこかで見た事がある気がする。

こんなに可愛い娘一目でも見たら忘れないと思つただけどなあ……？

雄一や根本も誰か分かつていないようだし、他のFクラス、Bクラスの皆も同じような反応をしている。

いや雄二は確かに驚いていた様子をしていたがすぐに納得したような顔をした。

雄一はこの娘が誰なのか知っているようだ。

ついに明久は友達の顔を忘れるほどバカになつたのか。

「明久がとてもないバカなのは常識だろう? そんなことよりいいのか? ナル」

雄一がそう言いながら女の子の身体の辺に顎で指す。

「いますぐ雄一に制裁をしたいところだが、それどころじゃない。この娘がナル？あの決して自分の事を女と認めないあのナル？」

「なんの話だ?」あつ

ナルらしき女の子が自分の服を確認するどじんどん青い顔になつていく。

「う、あ、あ、……ツ?」

そしてブンッブンッと周りを見渡す。

「ああ……着替えるの忘れてたあああああ！？つみ見てない……訳ないよね……つちよ康太！俺の服はどうした！？」

「……………体育館裏に置きっぱなしのはず」

「ええーーー、『ああああああああああー！俺の服うううううー。』

顔を青くなったり赤くなったり涙目になりながら慌てるナル。  
やばい。果てしなく萌える光景だ。

そのまま教室から走り出でていった。

「…………マッシュリー。写真は？」

「（パクッ）…………つい撮るのを忘れてた」

「ムッシュリーにしてはめずらしく失態だね」

「…………だけど他のナルの写真を大量に入荷した」

「一枚こぐり？」

「…………（パリパリパリ）」

「へへへ…………今自分の生活費が厳しくなるけどやむを得ない。買った

ー。」

しかしながらルの女装？姿を見れたのは幸運だった。といふか初めて見  
たよ。

「土屋。俺にも売つてくれ」

ん？根本君もナルの写真欲しいのかな？  
ナルのファンがどんどん増えていくね。

「…………金さえ払ってくれれば誰にでも売る」

そう。ムツツリーはムツツリ商会なるものを経営しているのだ。

活動内容は文月学園の人気のある人物の写真を文月学園生徒限定に  
売っているのだ。

写真だけじゃなくそれを利用した抱き枕なども販売している。

その収入がどのくらいあるかは常連である僕にも詳しく分からな  
いが、高性能な盗聴器具などをたくさん買える程度にある事ぐらいは  
分かる。

ちなみにその中で特に人気なのは秀吉、ナルである。

「コホン。あー…………もう話を再開してもいいか？」

雄一が話の流れを戻す。

あー、そういうば今はBクラスとの交渉をしている最中だった。

「…………条件は何だ」

「とりあえずBクラスにやつてもらいたい事はだな。Aクラスに行  
つて、試召戦争の準備ができるいると宣言して来い。そうすれば今  
回は設備については見逃してやつてもいい。ただし、宣戦布告はす  
るな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意思と  
準備があるとだけ伝えるんだ」

「……それだけでいいのか？」

疑うような根本君の視線。

「ああ、そうだ。なんども口にしたセリフだが俺達の目標はあくまでAクラスだ」

「それはこちらにとつても助かる話だ。受けよバ……いつにけばいい？」

「ふむ……今すぐにでもしてくれたら助かる」

「分かった。早速行つてこよ。本当に施設はいいんだな？後からやつぱりAクラスは無理だからBクラスのを寄越せ。というのはナシだからな？」

「当然だ。約束は守る」

根本君はフンッといいながら早速Aクラスに向かつて行つた。

「…………雄一。いよいよAクラス戦だね。けどBクラスでさえ勝つのが厳しかったのにAクラスになんか本当に勝てるの？」

「その話は明日じよ」

「そう?まあいいや」

そうして僕たちはいつまでもBクラスにいるわけにもいかないのでFクラスに戻った。

ああ……なんということだ。

急いで保健体育の先生を探さないと。とずつと考えていたせいですっかり男子制服に着替えるのを忘れていた。

……といふことは俺は先生を探している最中約一時間ずっと校内を女装しながら走り回っていたのか！？

いい、い、いや！ 女装してるんだから俺が誰なのか分からぬはず！ それに一応他のクラスは授業中だったから見られていなればどうう。

ふう。無駄に焦ってしまった……って何の解決にもなってねえ。Fクラス、Bクラスの面子には思いっきりバレてたじやないか……

しかも先生を探すのに職員室にも入ったから他の教師にも見られた  
つてことになる。

その後、西村先生（保健体育教師）を見つけてBクラスに行くよう  
にと言つた。

つまり西村先生にすら見られたのか。

……でも職員室でも西村先生にも自分に對して何の疑問（ほら男  
が女子制服を着ているなんておかしいだろ？）もぶつけなかつた  
のが一番気になる。

そうしたらF、Bクラスの時にこの醜態を見せずに済んだものを。

……氣付かなかつた？い、いやそんなはずはない。  
きっと前髪で顔半分を隠してるから分からなかつただけだろ？  
そうだ。そうに違ひない。

そんな事を考えながら俺は体育館裏に置いたままの服を取りに行く  
為に廊下を走つていたのだが。

曲がり角に誰かがいたので急停止した。しかし間に合わず、勢いこ  
そなくなつたものの誰かにぶつかってしまった。

「つちやー！？」

「はうー！？」

先に誰かが声を上げ遅れて俺も声を上げてしまった。

俺はぶつかつたせいでバランスを崩し転びかけたのだがぶつかつた  
相手に転ばないよう両手で両手で抱き押さえられた。

「大丈夫？ キミ」

「す、すいません！ 大丈夫です」

ぶつかつた相手は合コンの時にいた工藤愛子だった。

そういうえばもう授業が終わって次の授業までにある休憩時間だった。

「廊下は走っちゃ危ないよ～？……んん～？君どつかで会ったような……？」

「ギクッ！…………き、気のせいじゃないですかね！？それに同じ学校の生徒なら顔ぐらい合わせるんじゃないかな？」

やばい！今更俺の女装を見た人が増えてもいまさら変わんないような気もするがそれでもやはりバレたくはない。

「ん～まあそれはそうなんだけどね…………」

「…………じ、自分急いでるんで、じゃーすいませんでした！」

ガシツ！

バレる前に体育館裏に向かう道に身体を向けて走り出そうとしたのだがその前に両肩を掴まれた。

結構強い力で掴まれているので逃げられない。

そして工藤は俺の顔をじっと見つめてくる。

ま、まあこゝのままじゃバレるーって、ひょー顔近い！

ジーッ

ダラダラー

冷や汗が止まらない。

「…………秋本君？」

バレた！

「ひ、人違います。（トイ）」

苦し紛れだが誤魔化す為に顔を横に背ける。

あ、やばい。工藤が凄いニヤけてる。

「ふーん。人違いか？でもポーテールとか似合いそうだよねー？」

「やるな」となごで、ぱあさまよへ。

「なんか変な方便が混ざつてゐよ。せいかく可愛い顔してゐんだから前髪で隠すなんてもったいないよ」

「こ、ここですからー放してくださいー」

「うう今たのも何かの縁だしどの十回の交流を深めよう。おおと一度ことじいろ髪留めの『ゴム』が。

「違ひー俺はおとつ……じゃなくてとにかく急いでゐるんです」

「おとつへねどがどうしたのかなあ？」

「うふふ、う

「うひーで俺が男とこづわけにもこかないし……

「ふあわふ

「シーッ。」

「え。まほつかないじゃん。……それをひじてひと

俺がどうつか迷つてゐる間に抵抗する腰もなく前髪をどかされポニーテールにされた。

「で、秋本君どうして女装してるの? とてつもなく自然だけじ

「ガクッ……結局バレた……」

「ああ。なるほど。本来の性別が女だったけど訳ありで男として過<sup>い</sup>」「違うから! Bクラス戦での作戦で必要だったんだよ!」 そうなの? …… 戰争で女装が必要ってどうしたら繋がるの?」

俺は諦めて事情をすべて工藤に話した。

もちろん俺達の目標がAクラスなのとAクラス戦にかかわる話はしていい。

一応工藤がAクラスという」とはまたまだけど知つてはいたからね俺。

「…………つふ、ククッ、アハハハハ!

「わっ笑うなよ! こつちは真剣にやつてたんだぞ!」

「アハハ……ハア……ブブツ、」、「めんじめん。でもそれを女装しなくても成功したんじゃない?」

「全く……ん? 女装しなくてもできたってどうゆうつことか。女装しなくちや相手に気付かれるじゃないか

もし女装しなくて済んだなら俺は何のために女装したんだ。

「だつて相手が待ち合わせ場所に来る時までは姿見られないんだから。これが罠だと気付かれてもすぐ倒せば済むんじやないかな？」

「あ……」

「……」

「……」

この沈黙が辛い。

「……」

「ちよ……元気だしなよ。さつと無駄じやなかつたんだよ。何か他に理由があつたんだよ（すい）悲しそうな目をしていろのよー。」

「うん……とつあえず着替えるために体育館裏にまで取りに行つてくるよ」

女装しなくても済んだという事に気付いた俺は自分がした事が無駄だとわかりかなり沈んだ気持ちで体育館裏までフラフラと歩いて行つた。

アハハツ  
……

## 第十一話（後書き）

微妙な感じで終わつた……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7998o/>

---

バカとテストとオレッ娘（笑

2010年12月12日13時23分発行